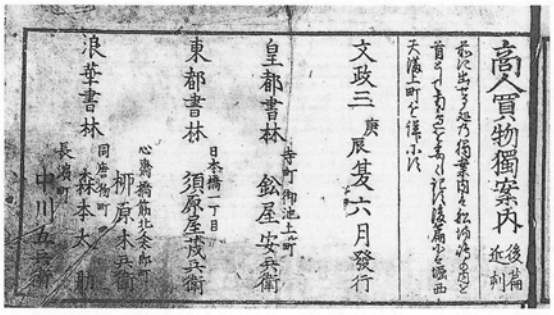
商人買物独案内　　川崎屋吉郎兵衛著　　文政三年(1820)刊本　　1冊

大坂の商店便覧で、業種・取扱品目ごとにいろは順に配列されている。各商店の宣伝も兼ねており、掲載枠の大小は広告料の多寡と関係があるため、必ずしも大店が大きく記されているとは限らない。『大坂本屋仲間記録』の「新板願出印形帳」や「出勤帳」などによって、文政二年（1819）七月五日に播磨屋五兵衛（中川五兵衛、中川芳山堂）が『商人買物独案内』の出版を願い出たが、内容的に問題多々ありとの指摘を受けて一旦差し戻され、内容・字句の訂正を行った上で、翌年四月に再度願い出、同年六月二十三日ようやく出版に漕ぎ着けたことが知られる。宗田文庫本はその初版本。従来、『商人買物独案内』については、文政七年（1824）に江戸・大坂のそれが播磨屋五兵衛から同時に刊行されたというのが定説となっていたが、宗田一氏は、文政三年（1820）六月付けの刊記を持つ本書の存在と、『商人買物独案内』出版の出願・許可に関する『享保以後大阪出版書籍目録』の記載を根拠に、『中央公論』昭和36年（1961）12月号に「大阪の『商人買物独案内』初版本」を公表され、『商人買物独案内』は文政三年六月に大坂のものがまず出版され、それが大いに好評を博したため、文政七年に再版され、そのとき江戸の『商人買物独案内』も刊行されたことを明らかにされた。（北川　央）

DC/48/Na　　00199476



唐蘭薬種荒物高下録　安政六年(1859)写本　1冊

天保九年（1838）六月幕府より大坂町方に出された触れにもとづいて、大坂の薬種問屋が作成した薬種相場表の一つ。表物として大黄・甘草・広東人参など24品、根株として附子・山帰来など37品、木草として沈香・白檀など８品、薬実として枳実・枳殻など18品、脂煉として乳香・安息香など８品、金石として水銀・硼砂など11品、気形として麝香・犀角など14品、紅毛としてサフラン・テリアカ・幾那々など21品、荒物として本蘇木・氷砂糖など７品の計148品を挙げ、各薬種について天保五年（1834）から安政六年までの26年間の相場の高下を高値安値を付して表わしたものである。また、宝暦六年（1756）から天明五年（1785）までの30年間、天明六年（1786）から享和三年（1803）までの18年間および文化元年（1804）から天保四年（1833）までの30年間の各薬種の高値安値も付記してある。江戸中後期に漢方と蘭方で使用されていた日用常用の代表的薬種を網羅しており、医薬史々料・経済史料としても貴重である。（遠藤正治）

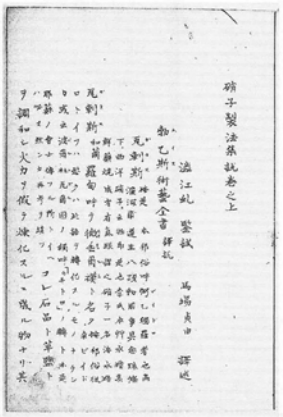
DE/231/To　00209536

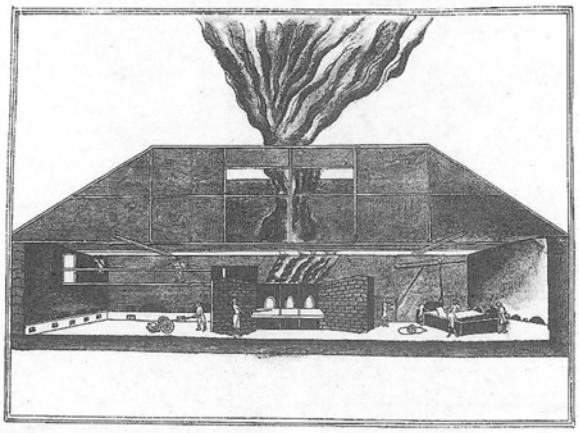
硝子製法集説(全)　　渋江虬鑑試　馬場貞由訳述　　文化七年(1810)写本

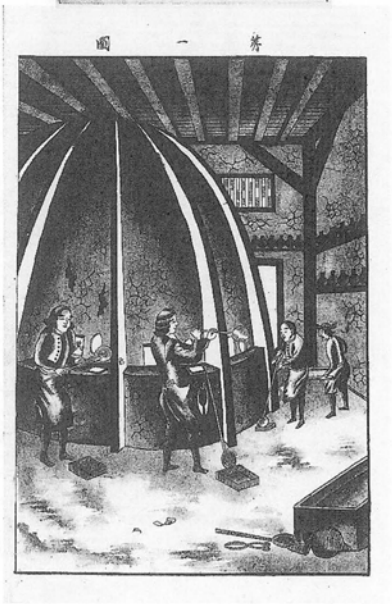
(大判77葉　7図)1冊

本書は通詞で天文方の訳官馬場貞由（佐十郎）が幕府の命を受けて、硝子の製法を訳した官撰書。鑑試者渋江は幕府の医官。本書は3巻からなる。上巻は和蘭人E．ボイスの『芸術全書』(E. Buys: Woordenboek van konsten en weetenschappen: 1772)の第4巻から訳し、中巻はフランス人カレルタの物産書、下巻はショメールの『日用百科字典』(M. N. Chomel: Algemee Huishoudelijk–, Natuur–, Zedekundigen Konstwoordenboek）の第2巻から硝子製法に関わる部分を訳し、随所に訳注を入れたものである。凡例によれば、ガラス製品は南蛮時代に舶来されて「びいどろ」と通称され、江戸初期には製造法も伝わった。しかし、品質は粗悪で、舶来品に比べてひどく劣るために、文化七年、硝子製法の調査を命じられて、蘭書から訳出したものである。本書は未完であるが、写本は本書の他に静嘉堂文庫と内閣文庫の所蔵本が知られるだけの珍本である。訳者馬場貞由（1787～1822）は長崎生まれの通詞、文化5年（1818）に幕府の天文方に抜擢されて、ショメールの百科全書『厚生新編』翻訳に従事したが、その主力メンバーであった。(酒井シヅ)

DL/554/Ba　　00194410


硝子製法集説卷之上





雍州府志　　黒川道祐著　10巻　　貞享三年(1686)刊本　　10冊

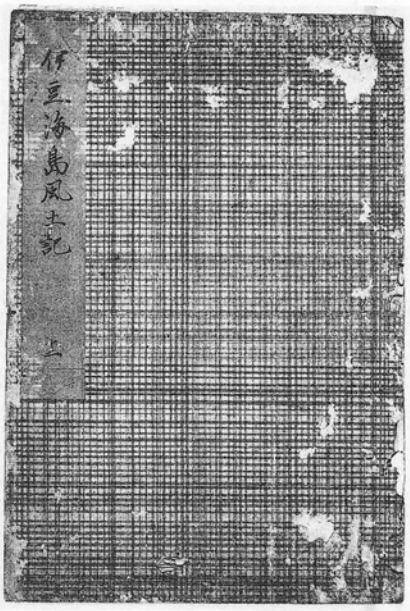
雍州とは中国の漢・唐の都、長安のある雍州に模したもので、山城国の唐名である。本書はその地理、沿革、寺社、土産、古跡、陵墓などについて漢文体で記述している。著者黒川道祐は安芸の人、京都にきて儒を林道春に、医を堀杏庵に学んだ。広島藩医であったが病弱のため、辞して、著述に専念した。自序によると、道祐は平素より多病のため、閑歩を養生の一術とし、かつ名所古蹟を尋ね歩く癖があり、その来由を尋ねて帰宅後、小冊に記していたところ、いつしか数巻になったので、これを10冊として出版した。巻6、土産門上、薬品部には50数種の名薬を紹介している。その中に産前産後の名薬として、安芸大膳亮家に伝わる神仙散・安栄湯について、家祖安芸守定が龍神から伝えられた由来を記している。興味深い地誌である。(杉立義一)

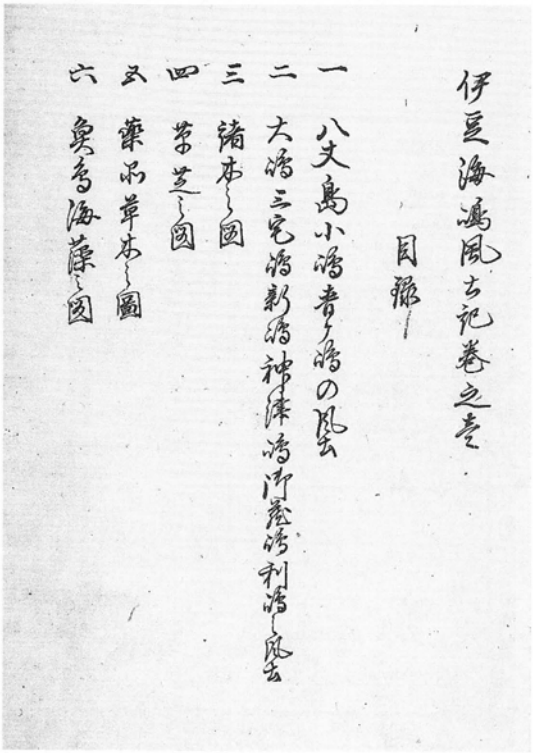
GC/156/Ku　　00194072, 00194073, 00194075-00194079
00194081, 00194082, 00194084

伊豆海島風土記　佐藤行信、吉川秀道共著　3巻　安政二年(1855)写本　3冊

天明元年（1781）佐藤行信・吉川秀道の原著になるとされる伊豆七島の地誌・物産書。上巻は、八丈島・小島・青ヶ島の風土、続いて大島・三宅島・新島・神津島・御蔵島・利島の風土について記す。巻中には諸木71品67図、草芝101品101図、巻下には薬品草木71品71図、魚鳥海藻87品53図を収録。図はすべて彩色。二百余年前の伊豆七島の風俗、自然を知るうえで貴重な資料といえる。伝写本は少なくないが、巻冊数には若干の出入りがある。宗田文庫本の末冊末尾には「文化四年謄伝原江川太良左衛門蔵也与右駿陽市尹貴志忠美侯蔵安政二年乙卯春田宮邦救写之」の奥書きがあり、「田宮氏図書記」の蔵書印がある。（小曽戸　洋）

GC/72/Iz　00209570-00209572




伊豆海島風土記卷之壹

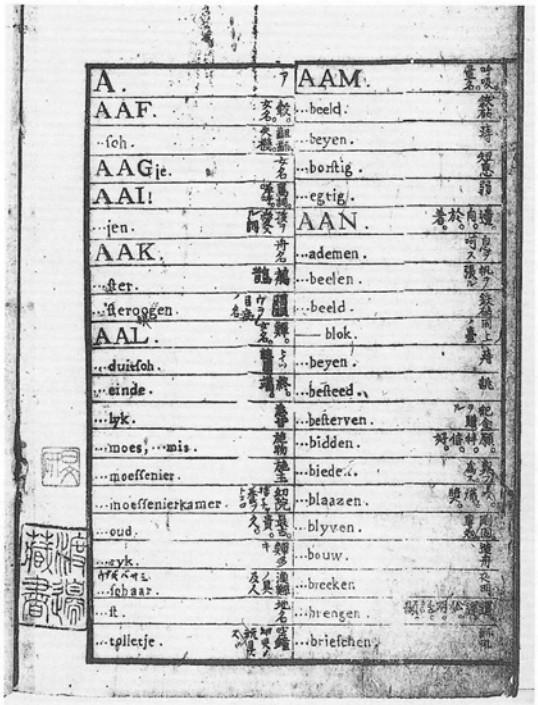
目錄

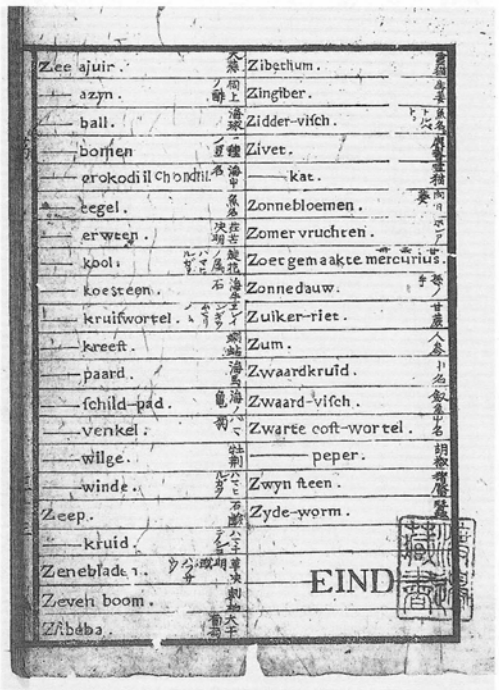
一　八丈島小島青ヶ島の風土
二　大島三宅島新島神津島御蔵島利島の風土
三　諸木〻図
四　草芝〻図
五　薬品草木〻図
六　魚鳥海藻〻図

譯鍵　藤林普山著　1巻(294丁)刊本　1冊

本書は本邦第二番目の蘭日辞典である。著者藤林普山（山城国普賢寺出身　1781-1836）は、始め大垣の江馬蘭斎に蘭語を学んだ。さらに文化五年に京都にきた海上随鴎に入門した。随鴎は江戸で、大槻玄沢の指導下に、蘭日辞典『ハルマ和解』（約８万語）を編し、1796年に30部を刊行した。しかしあまりにも高価であり、さらに内容豊富のため、初学者がこれを筆記する途中で、たえきれなくて蘭学を廃する者があった。そこで普山は親友小森桃塢と相談し、師の許可をえて３万語をえらんで新しい辞典「訳鍵」を文化七年に完成して、初版百部を刊行した。本書は半透明和紙（雁皮紙か）294丁に横書二段組、各21行で２万数千語を含む。見開に、「Nederduitsche TAAL　譯鍵」最後尾に「EIND」と印刷してある。他の解説文によれば、乾坤二巻、本文は本書と同じく294丁であるが、巻尾に太西葯名33枚を附し、収録語数は約27000語に達す。さらに凡例、附録（後に『蘭学逕』として刊行）を附し計三巻という。宗田文庫の本書は本文１冊のみである。（杉立義一）

KS/442/Fu　00196021

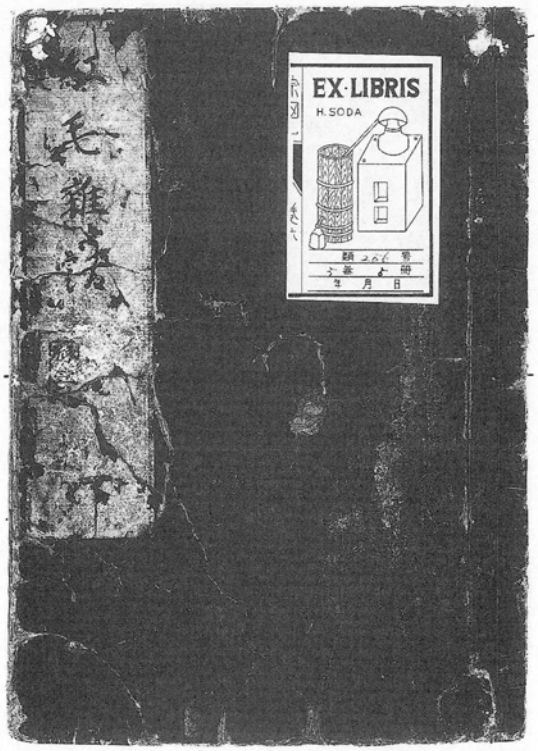




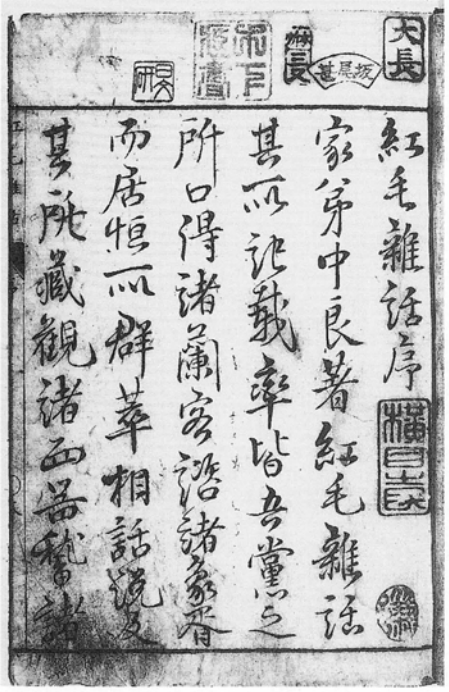
紅毛雑話　　森嶋中良編　5巻　天明七年（1787）刊本　　5冊

江戸時代中頃、紅毛人（オランダ人）を通じて入ってくる外国の情報は、好奇の対象であった。その話題を集めたのが、本書である。編者森嶋中良は桂川国訓の次男であり、長兄の法眼桂川国瑞（甫周）が、江戸参府の和蘭商館館長を宿舎長崎屋に訪れた際に同行して、質疑した事柄や、桂川家に集まった蘭学者の話題となった海外の珍しい事柄を筆記していたものを、出版元の求めに応じて板行した。全5巻66項目を教え、景物、地歴、動物、医学、病気などについて平易な文章でつづっている。巻3には顕微鏡（ミコラスコービュン）の図とこれで見た写生図12図をのせている。またエレキテルの図もある。本書の序文は甫周と大槻玄沢が、後序は前野良沢と宇田川槐園が書いていることをみても、本書が蘭学草創期における興味ある啓蒙書であったかがわかる。宗田文庫本には巻1のはじめに7ヶの蔵書印有り、見返には、「江戸の水」を売り広めた式亭三馬の署名がある。

（杉立義一）



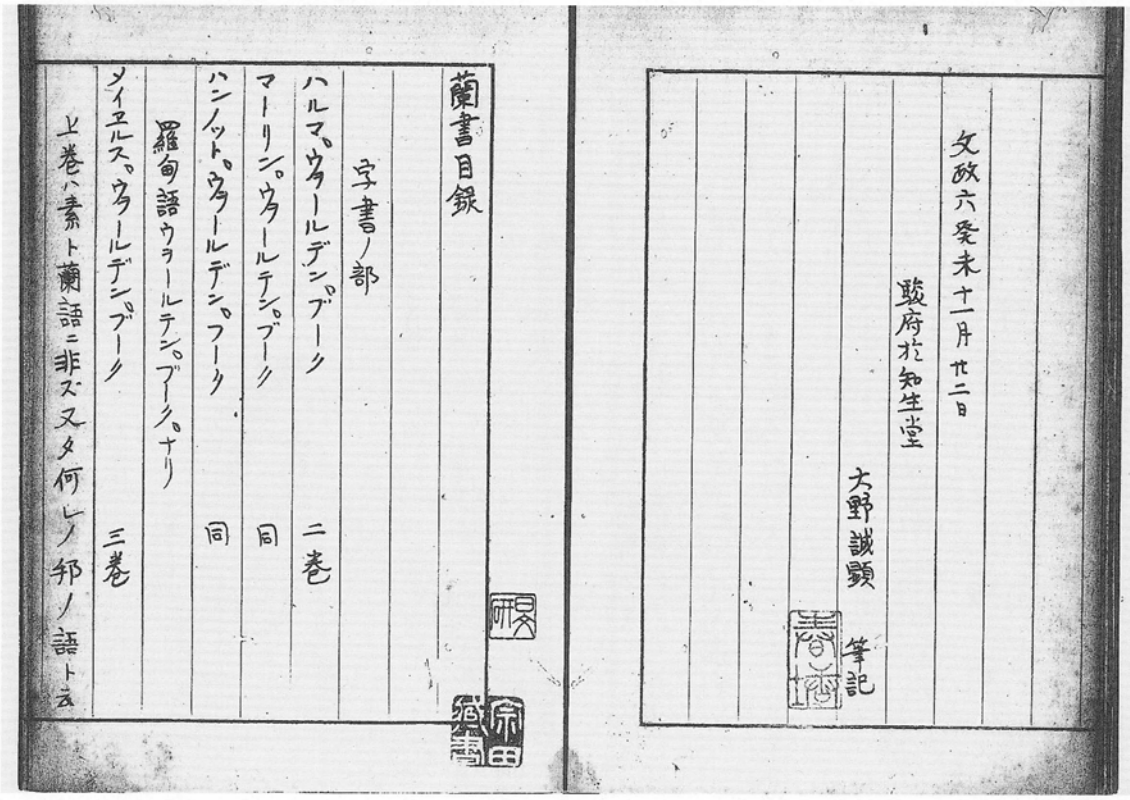
M/32/Mo　　00209559−00209563



和蘭書籍目録　　吉田長淑著　　文政六年(1823)写本　　1冊

わが国ではじめて蘭方内科を標榜して開業した吉田長淑、名成徳、字直心、号駒谷が見聞した蘭書および座右の蘭書について著者・書名とその内容を略記した目録。題言に「加賀医官吉成徳直心謹記」「文政六年十一月廿二日駿府於知生堂大野誠題筆記」とある。長淑は文化七年（1810）に加賀藩医となり、文政七年（1824）金沢で病没しているので、晩年の遺稿の写本か。辞書10部、医書12部、泰西博物書13部、天文地理雑書18部の計53冊を挙げている。文政中期頃の蘭書の流布状況を伝える数少ない史料である。門人として高野長英・足立長雋・小関三英などすぐれた俊才を輩出した長淑の蘭学塾蘭馨堂の蘭書のレベルをも窺うことができよう。（遠藤正治）

M/32/Yo　　00199672

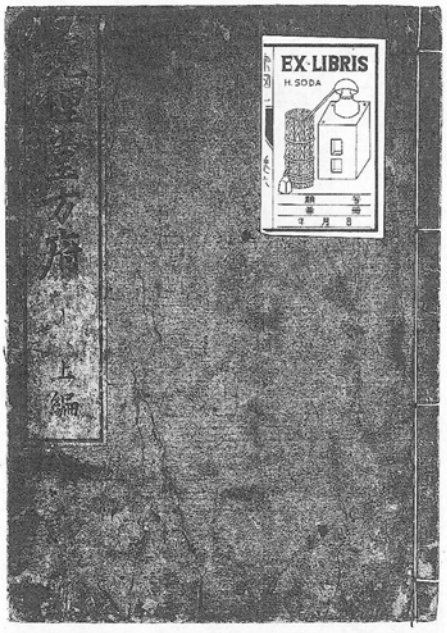


文政六癸未十一月廿二日
駿府於知生堂
大野誠題　筆記

蘭書目録

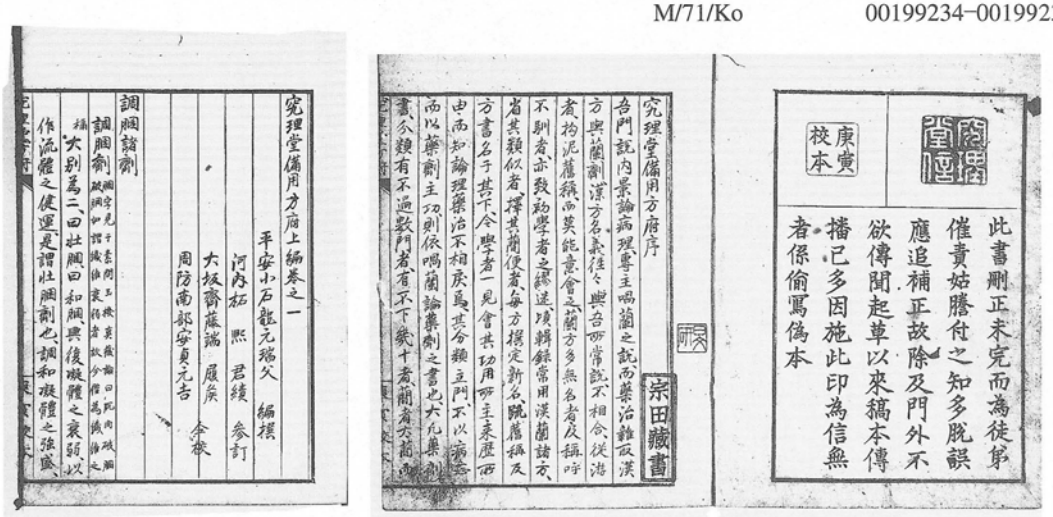
字書ノ部
ハルマ。ウヲールデン。ブーク　二巻
マーリン。ウヲールテン。ブーク　同
ハンノット。ウヲールデン。ブーク　同
羅甸語ウヲールテン。ブーク。ナリ
メイヱルス。ウヲールデン。ブーク　三巻
上巻ハ素ト蘭語ニ非ズ又タ何レノ邦ノ語ト云

究理堂備用方府　　小石元瑞著　3編各3巻　［江戸後期］写本　　3冊



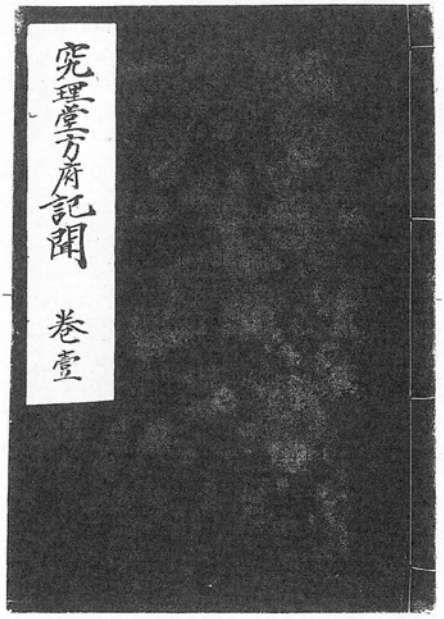
小石元瑞の常用漢方を収録した処方集。『究理堂方府』とも。文政十二年（1829）元瑞序ならびに凡例（附言十則）。上編巻1は調胭諸剤、巻2は調血諸剤、巻3は疎利諸剤、中編巻1は丸部・散部、巻2は錬部・糕部・液部・浸部・漿部・密部・酒部・醋部・餌部、巻3は単用製薬品の糖製部・耐製部・熱膏部・升露部・升精部・升油部・製塩部・造醸部。下編巻1は蒸剤部・糊剤部・擦剤部・洗剤部、巻2は嗽剤部・注剤部・摻剤部・敷剤部・貼剤部、巻3は塗剤部・気剤部・附録となっている。元瑞の名は龍、号は樫園。父・元俊の究理堂を継承、発展させ、多くの門人を育てた。著書は多いが、刊本とはならず、写本として伝えられた。本書も同様。宗田文庫本の上編と中・下編は伝本を異にし、上編巻首見返しには究理堂の正規校訂本であることを示す整版の刻文と「究理堂信」「庚寅校本」の印があり、版心魚尾上に「究理堂方府」、版心下方に「庚寅校本」の刻字のある罫紙が用いられている。この上編の庚寅校本は他に同様の伝本の存在が知られない貴重本で、『江戸科学古典叢書』に影印収録され、宗田一氏の解説が付されている。中・下編も版心魚尾上に「究理堂方府」の刻字のある罫紙を用いており、「山野氏印」の蔵書印がある。宗田文庫には別に丙午再校・癸巳校本に基づく明治三年写本もある。（小曽戸　洋）

M/71/Ko　　00199234-00199236



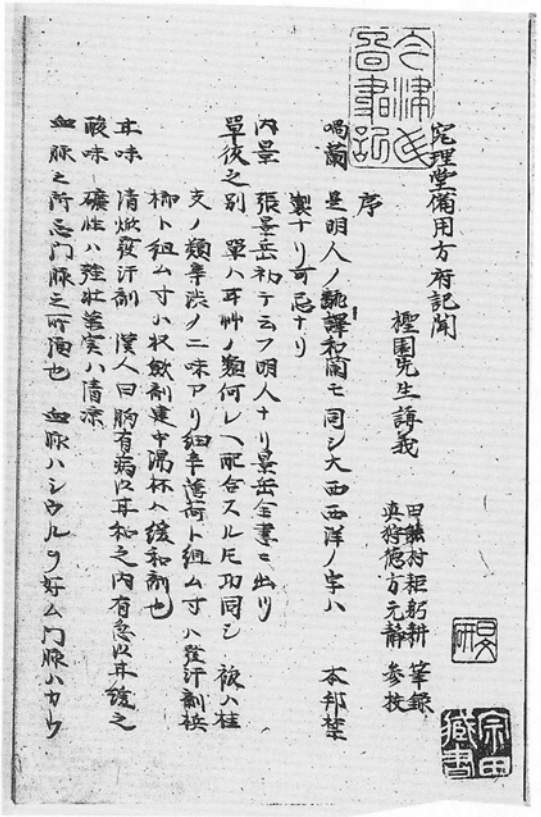
究理堂備用方府記聞

小石元瑞著　門人等校録　20巻　弘化三～四年(1846～47)
写本　10冊



小石元瑞の『究理堂方府』上編収録処方の具体的運用法を解説した書。『方府』上編の飲剤の運用法を弟子たちが元瑞に講義を乞い、元瑞が需めに応じてみずからなした口述を筆録したもの。宗田文庫本は、樫園先生（元瑞）講義、田能村耜躬耕筆録、真狩徳方元静参校となっており、「今津氏図書記」の蔵書印がある。他に元瑞口授、田能村耜躬耕・寺地豊子亭原本、斎藤延永年校正などとする伝本もあるが、伝本は『方府』に比して稀で、宗田文庫本は完揃本として価値が高い。宗田文庫本の巻首には宗田氏の筆写になる京都小石家究理堂文庫本『究理堂備用方府記聞』の斎藤延識語（弘化四年）も添付されており、伝本書誌を知るうえで参考になる。（小曽戸　洋）

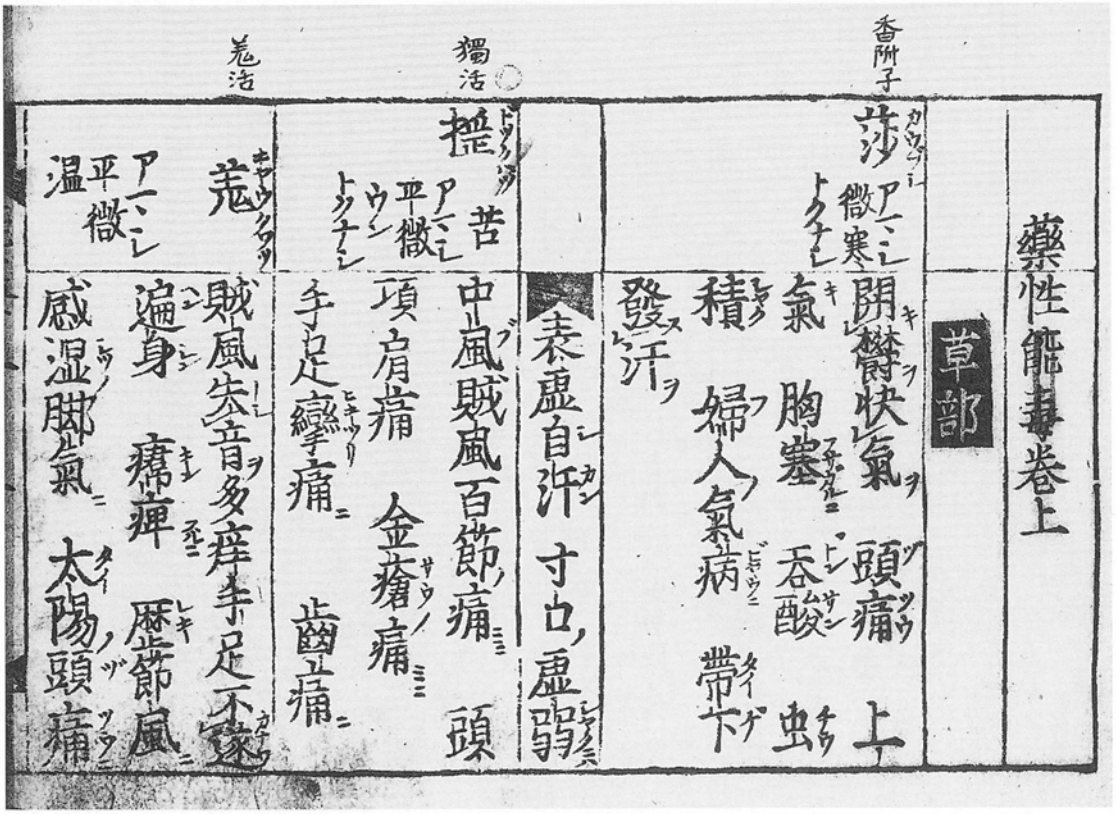
M/71/Ko　　00199216-00199226


究理堂備用方府記聞
樫園先生講義　田能村耜躬耕筆録　真狩徳方元静参校
序
是明人ノ魏譯和蘭モ同シ大西西洋ノ字ハ　本邦楷書
喝蘭
製十リ可忌ナリ
内景　張景岳初テ云フ明人ナリ景岳全書ニ出リ
單後之別　單ハ耳鼻ノ類幸渋ノ二味アリ細辛薄荷ト組ム寸ハ發汗劑模
支ノ類
柳ト組ム寸ハ收斂劑建中湯杯ハ緩和劑也
甘味　清燥發汗劑　漢人曰胸有病ハ耳和之内有急ハ甘緩之
酸味　礦性ハ強壮薬実ハ清涼
血脉之所忌門脉之所宜也　血脉ハシロルノ好ム門脉ハカラ

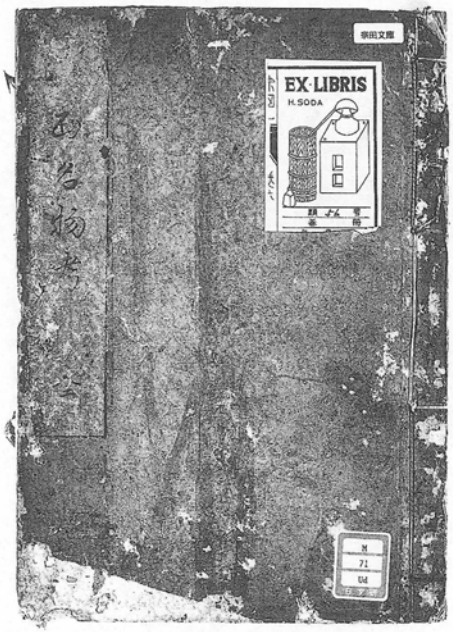
薬性能毒　　曲直瀬道三著　曲直瀬玄朔増補　2巻　［寛永後期］刊本　　1冊

曲直瀬道三（一渓）の原著、養嗣子玄朔の増補になる薬物書。道三原著は永禄八年（1565）の『本草能毒』が初。翌同九年の出雲毛利陣中の補訂本、天正八年（1580）の補訂本などがあり、収録薬物数は一定しない。のち『本草綱目』を入手した玄朔によって改訂され、慶長十三年（1608）に初刊。寛永六年（1629）には整版印刷され、以後版を重ねた。さらに江戸中期までには大幅な増補改訂版が多種出版され、広く流布した。書名は道三が最も重視した明医書『医学正伝』の「薬性に各々能毒あり、病に中たる者はその能によって安きを獲、病に中たらざる者はいたずらにその毒に惹かれて病を増す」の記載による。宗田文庫本は慶長十三年の玄朔奥書きを重刻し、巻尾に後世の所蔵者によって慶長玄朔刊本と記されるものの、本版は整版で、寛永六年を下敷きにした寛永後期刊本、さらにはそれを用いた慶安年間頃の後刷本かと思われる。（小曽戸　洋）

M/71/Ma　　00209535



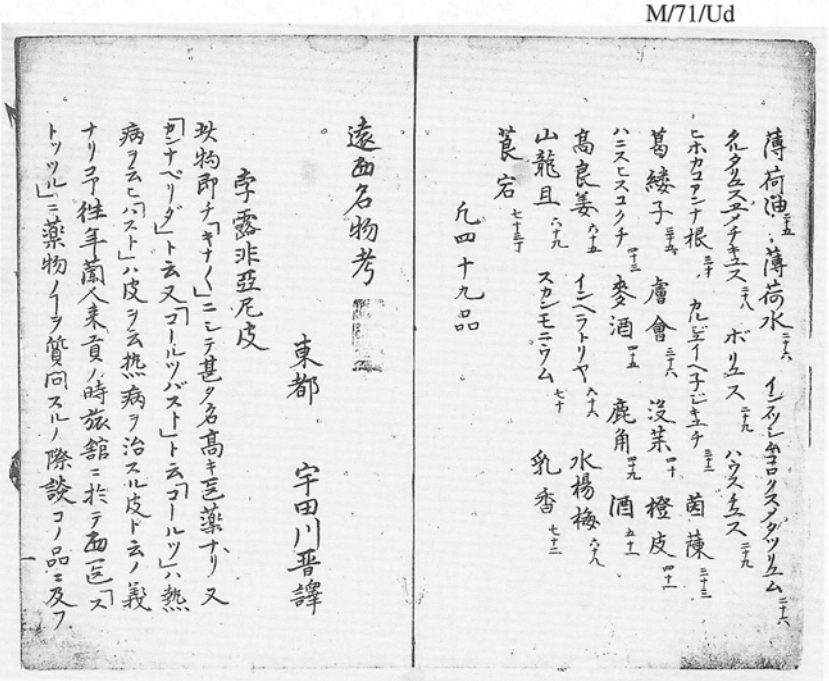
遠西名物考　宇田川玄随著　3巻　写本　1冊



宇田川家蘭学の祖宇田川玄随（名晋、号槐園）が、自著『西説内科撰要』収載薬物の解説のために編輯した稿本。『西説内科撰要』に所出する薬物と全く同じ順序で、ペルヒヤニ皮（キナ皮）・密・舎利別（シロップ）など49品の薬物を挙げ、それぞれ由来、形状、主治、方剤、製法などを訳述・考証している。ドイツの医学者J. J. Woytの著書の蘭訳本“Gazophylacium medicophysicum, of Schat-Kamer der genees-en natuurkundige zaaken, Amsterdam”(1741) など7種の蘭書を引用している。寛政初期の西洋内科導入時のわが国西洋薬物知識をうかがうに好適な書物である。別に「東都宇槐園訳考、荘内医官岩田松碩、大垣医官江澤養壽、大垣南條玄雄、東都吉田成徳輯」の3巻3冊本も知られているが、当宗田文庫本は編輯者の記載がなく、「東都宇田川晋訳」とのみある。本書および本書の薬物については宗田一著『渡来薬の文化誌　オランダ船が運んだ洋薬』(1993年刊) に詳しく解説されている。なお、宇田川榛斎訳『遠西医方名物考』と書名がよく似ているので混同されることがあるが、全く別書である。

（遠藤正治）

M/71/Ud　00197566



遠西名物考

東都　宇田川晋譯

李露非亞尼皮

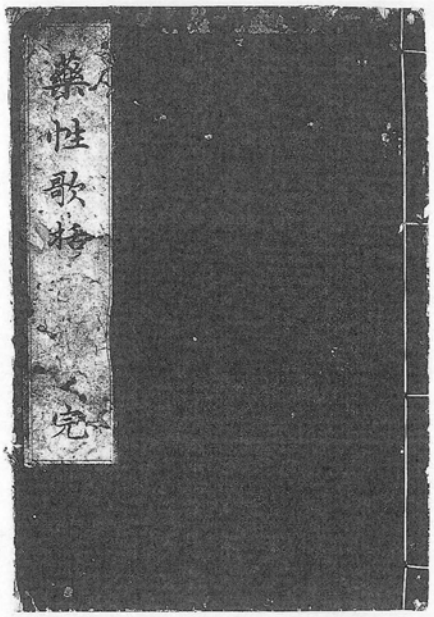
此物即チ「キナ〻」ニシテ甚タ名高キ薬ナリ又「カンナベリダ」ト云又「コールツバスト」ト云「コールツ」ハ熱病ヲ云ヒ「バスト」ハ皮ヲ云熱病ヲ治スル皮ト云ノ義ナリ予往年蘭人来貢ノ時旅館ニ於テ西医「ヌトツル」ニ薬物イヲ質問スルノ際談コノ品ニ及フ

薄荷油　薄荷水　イレタシ　ボリス　ハウス　ヒホカコアナ根　九里イ（子ごキチ）　葛縷子　膚會　没茉　橙皮　茵蔯　ハニスヒスヨクチ　麥酒　鹿角　酒　高良姜　イシヘラトリヤ　水楊梅　山龍且　スカンモニウム　乳香　莨宕

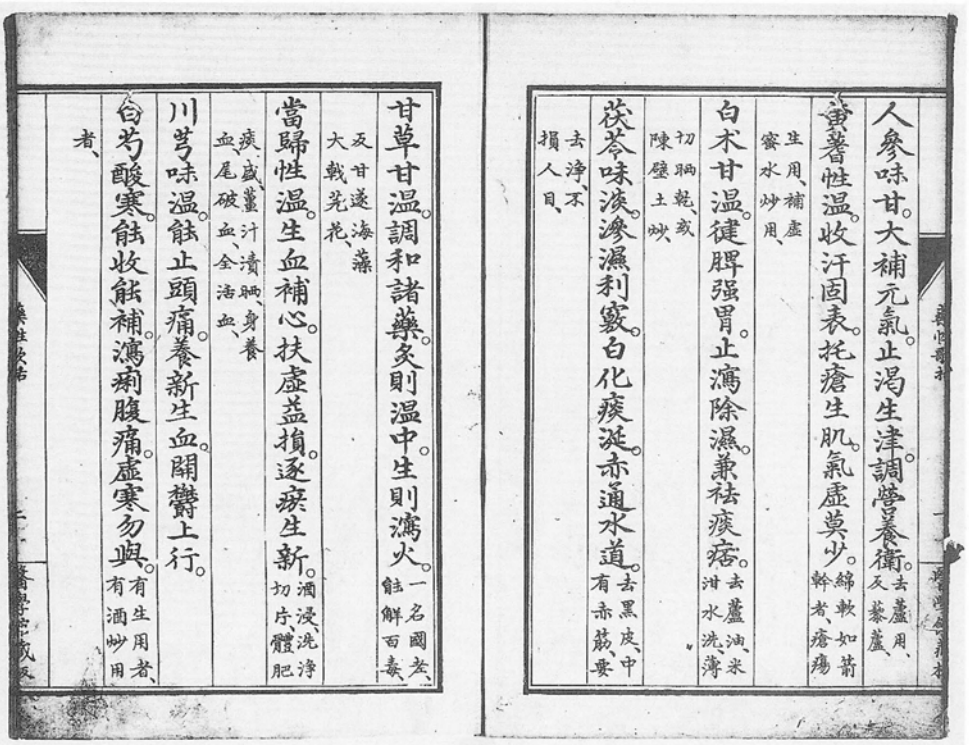
凡四十九品

薬性歌括　　浅井貞庵校訂　　天保十年(1839)刊本　　1冊

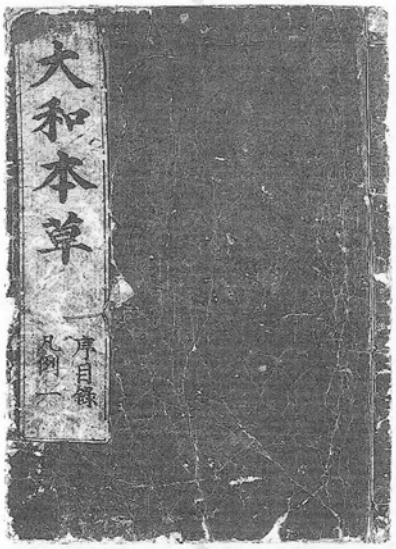
尾張医学館主浅井貞庵（名正封、通称平之丞、1770～1829）は、古方を批判し後世方の立場から講義や試問をおこなった。本草学の講義では、明の龔廷賢（雲林）の著『万病回春』（1587年刊）所載の「薬性歌」を用いた。実際の病人の療治のためにはあまり沢山の薬を知っている必要はなく、「薬性歌」程度の数で充分であるとした。「薬性歌」は283種の薬についてわずか16字の四韻詩の形式で薬性を記憶できるようにしたものである。貞庵はのち、廷賢の次著『寿世保元』（1615年刊）で増補された「薬性歌括」をとりあげ、校訂した。「薬性歌括」は395種のうち約半数の213種が草木、残り182種が鉱物・動物を基原とした薬をとりあげている。貞庵校訂『薬性歌括』は貞庵没後の天保十年（1839）、尾張医学館から出版され、医学館の講義や試問のテキストとして使用された。のち数刷が印刷され尾張藩内外に広く流布した。本書はその１本である。尾張本草学の隆盛に影響を与えた書として注目される。（遠藤正治）



M/71/Ya　　00196019

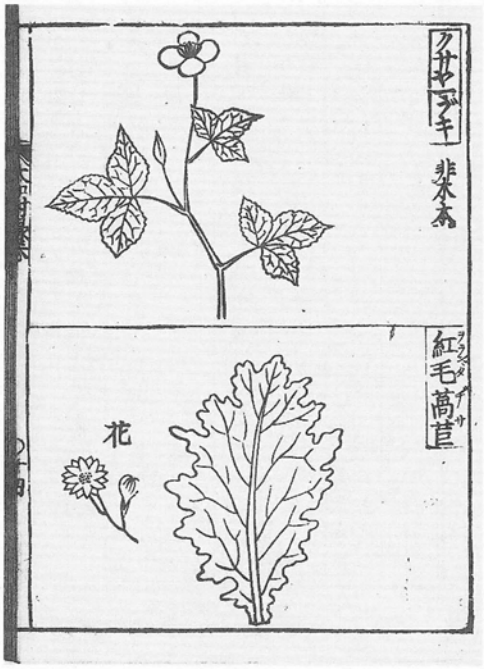

人參味甘。大補元氣。止渴生津。調營養衛。去蘆用、反藜蘆、
黃蓍性溫。收汗固表。托瘡生肌。氣虛莫少。綿軟如箭幹者、瘡瘍生用、補虛密水炒用、
白术甘溫。健脾强胃。止瀉除濕。兼祛痰痞。去蘆油、米泔水洗、薄切晒乾、或陳壁土炒、
茯苓味淡。滲濕利竅。白化痰涎。赤通水道。去黑皮、中有赤筋、要去淨、不損人目、
甘草甘溫。調和諸藥。炙則溫中。生則瀉火。一名國老、鮮解百毒、反甘遂海藻大戟芫花、
當歸性溫。生血補心。扶虛益損。逐瘀生新。酒浸、洗淨、切片、體肥痰盛、薑汁漬晒、身養血尾破血、全活血、
川芎味溫。能止頭痛。養新生血。開鬱上行。
白芍酸寒。能收能補。瀉痢腹痛。虛寒勿與。有生用者、有酒炒用者、

大倭本草　貝原篤信著　16巻・諸品図２・附録２巻　宝永六年(1709)刊本　19冊



福岡藩儒貝原篤信（益軒）が、明の李時珍著『本草綱目』を受容しつつ、自身の実地調査と実験にもとづいてまとめた本草書。宝永六年初版本で、京都・永田調兵衛版。普通『大和本草』と呼ばれる。和品358種・蛮品29種を含む天産物1362種を、水・火・金玉土石・穀・造醸・蔬菜・薬・民用・花艸・園艸・蔬類・蔓艸・芳艸・水艸・海艸・雑艸・菌類・竹類・四木類・果木類・薬木類・園木・花木・雑木・河魚・海魚・水虫・陸虫・介類・水鳥・山鳥・小鳥・家禽・雑禽・異邦禽・獣・人類の37類に分類し、名称・形状・生産・応用等を記している。『本草綱目』の分類より人為的であるが、より実用的博物的であり、日本本草学の自立の試みが示されている。『諸品図』２巻は、記載はないが、正徳五年（1715）版と思われる。動植物計331種を自筆で描いている。（遠藤正治）

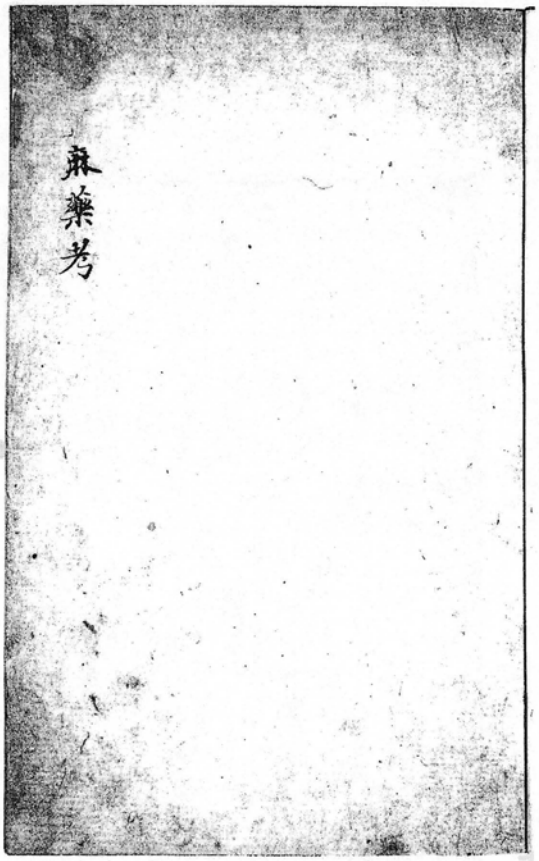
M/74/Ka　　00209512−00209530

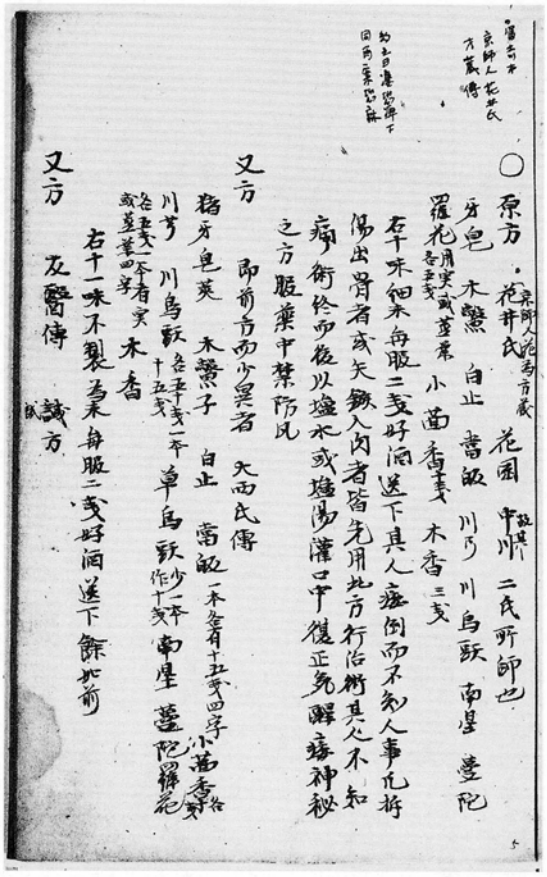


麻薬考　　中川修亭著　　寛政八年(1796)序　写本　　1冊

華岡青洲が麻酔薬（通仙散）を考案して、乳ガンの手術を行ったことは広く知られるが、本書は通仙散を考えるのに影響を与えた書物である。本書の序によると、寛政八年（1796）頃までに青洲が麻酔薬を完成して、すでに十数人に試みていること、また京都を中心に青洲より以前に麻酔薬を研究している人がいたことがわかる。また、本文に宗田一氏の注記があり、通仙散の原方は京都の人、花井千蔵の処方であること、花井は華岡や中川の師であった等がわかる。本書は宗田文庫本の他に富士川文庫（京都大学附属図書館）にあるが、宗田文庫本の方が善本である。（酒井シヅ）

M/74/Na　　00194778

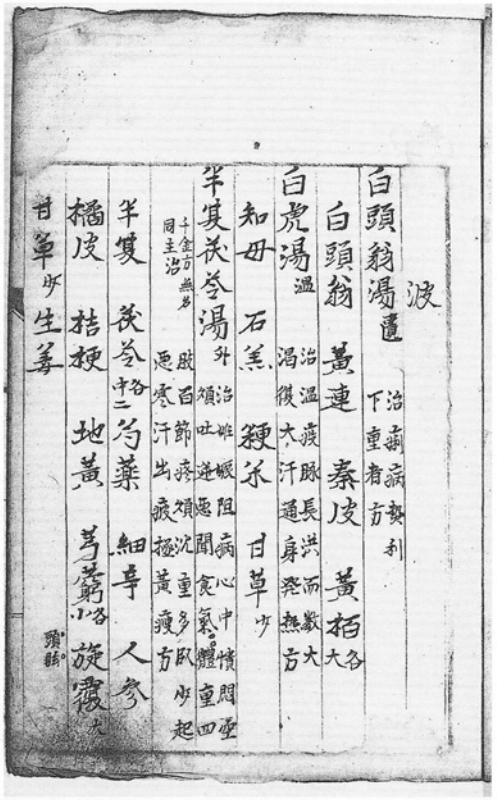

麻藥考


○原方　京師人花井氏為方藏　花園中納言二氏所師也
牙皂　木鱉　白止　當歸　川芎　川烏跌　南星　曼陀羅花各五錢　月実或蘆菔　小茴香三錢　木香三錢
右十味細末每服二錢好酒送下其人痳倒而不知人事凡將傷出骨者或矢鏃入肉者皆先用此方行治術其人不知痛術終而後以鹽水或鹽湯灌口中復正免醒毒神秘之方服藥中禁防風
又方　即前方而少異者　大西氏傳
牙皂莢　木鱉子　白止　當歸一本各有十五錢四字　川芎　川烏跌各五十錢一本或五錢　南星　曼陀羅花或莖葉四字各有実　小茴香各五錢　木香
右十一味不製為末每服二錢好酒送下餘如前
又方　友醫傳　識方

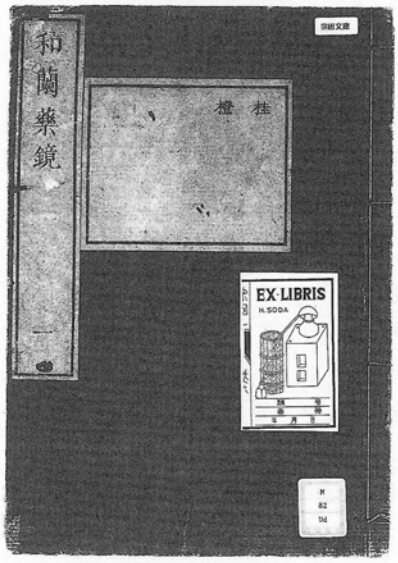
崇蘭館古今集験方　　[明治初期]写本　　1冊

福井楓亭（1725～92）の常用処方をまとめた処方集。『崇蘭館集験方』『崇蘭館試験方』『集験良方』などとも称し、未刊本で、数多くの伝写本（異本）がある。楓亭は京都の名医で、名は輗、字は大車、通称柳介。寛政二年（1790）、江戸医学館の前身、躋寿館に招かれて『霊枢』を講じ、翌々年には内直を命じられ製薬所の監となったが、その年江戸で没した。子に榕亭、孫に棣園がおり、その医方は受け継がれた。本書は『傷寒論』『金匱要略』以降、漢・唐・宋・元・明の名方、および自家経験方をイロハ順に配列し、600近い処方を収録している。福井家の臨床の実際を示す資料で、今日日本漢方界で汎用される処方も多く含まれており、その影響がうかがえる。宗田文庫本は料紙・表紙などからみるにおそらく明治初期の写本。手ずれ多く、よく使用された痕跡が明瞭で、明治以降もこのような漢方治療が行われていたことを示している。表包紙の外題には「（崇蘭館）福井方記」と記され、「浅井蔵書」の蔵書印が押されている。（小曽戸　洋）

M/76/Fu　　00196804

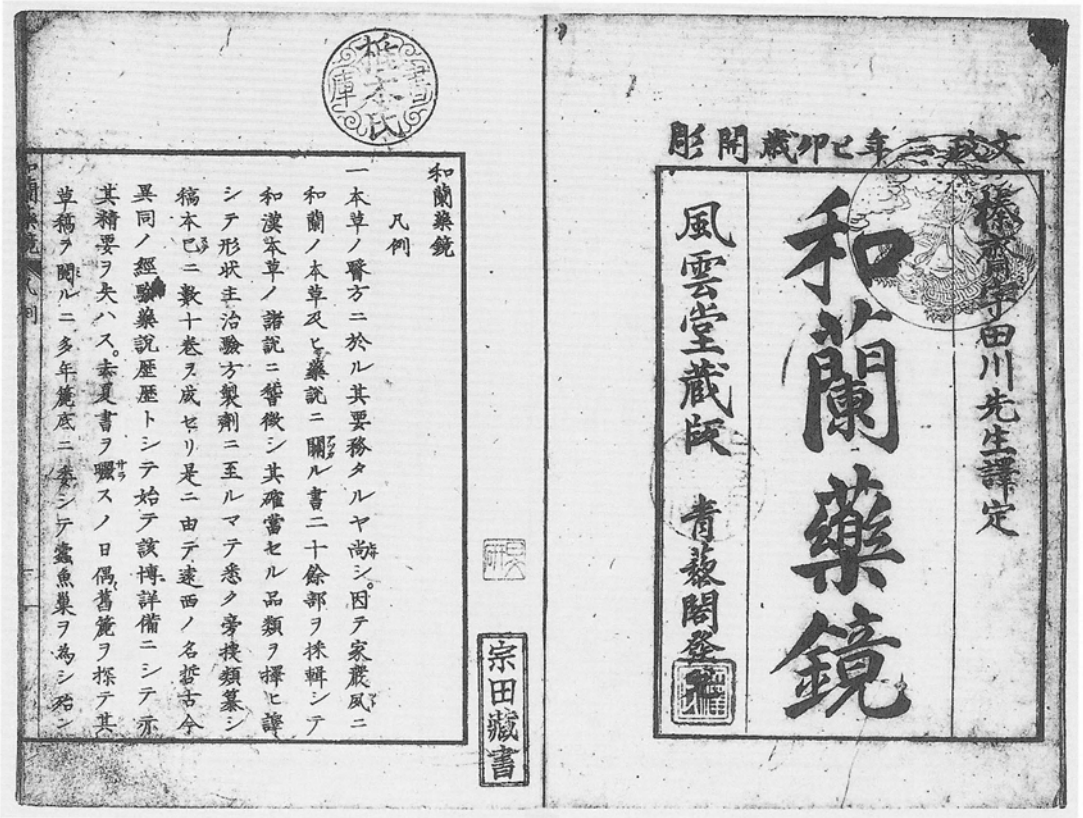

波
白頭翁湯 還 治痢病熱利下重者方
白頭翁 黄連 秦皮 黄柏 大各
白虎湯 溫 治溫疫脉長洪而數大渴微大汗通身発熱方
知母 石羔 粳米 甘草 少
半夏茯苓湯 升 治唯嘔阻病心中憤悶吐逆噫聞食氣體重四肢百節疼煩沈重多臥少起恶寒汗出疲極黄疸方 千金方無多 同主治
半夏 茯苓 各二 芍薬 細辛 人参
橘皮 桔梗 地黄 芎藭 旋覆 大
甘草 少 生姜
頭翁

和蘭薬鏡　宇田川榛斎訳・宇田川榕菴校　3巻　文政二年(1819)刊　3冊

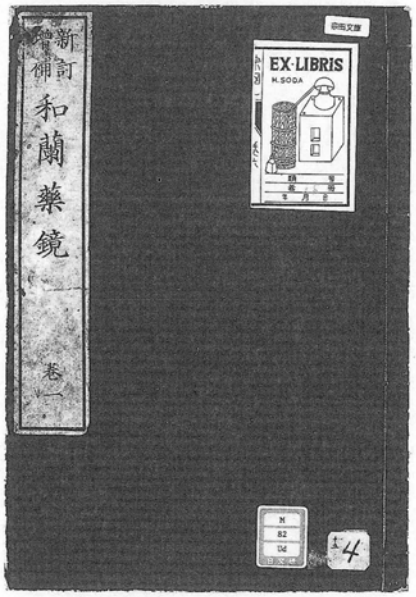


宇田川榛斎が、和漢方で日常通用する薬草木について、蘭方薬品との比較のため、オランダの本草書や薬説20余部を抄訳し、和漢の本草諸説とも照合して同定を試みた書。榛斎の稿本は数十巻あり、当初書名を「和蘭薬通」とする予定であったが、本草家曽占春の意見によって改められた。榕菴によって校訂され、文政二年の須原屋伊八等版として刊行されたが、あとが続かず、初編3巻にとどまった。桂・橙・楊・附・幾那幾那・良薑・山柰・竜胆草・纈草・竜牙草・薄荷・葵の12品をとり挙げ、それぞれ形状・効能・治験・製剤などを記述している。流布本は少なく、蘭方の代薬を探る初期の試みを伝える貴重書である。(遠藤正治)

M/82/Ud　00194957-00194959

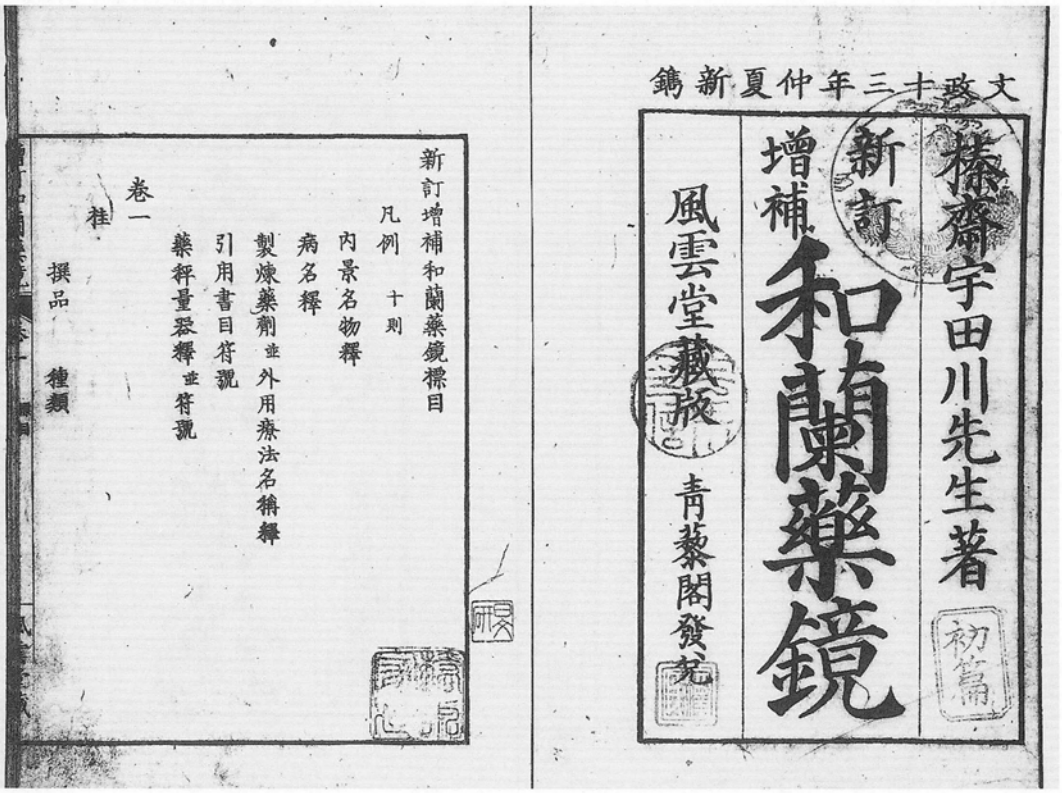

文政二年己卯歳開彫
榛斎宇田川先生譯定
和蘭藥鏡
風雲堂藏版
青藜閣發
和蘭藥鏡
凡例
一本草ノ醫方ニ於ル其要務タルヤ尚シ。因テ家藏風ニ和蘭ノ本草及ヒ藥説ニ關ル書二十餘部ヲ採輯シテ和漢本草ノ諸説ニ參徵シ其確當セル品類ヲ擇ヒ譯シテ形狀主治驗方製劑ニ至ルマテ悉ク旁搜類纂シ稿本已ニ數十卷ヲ成セリ是ニ由テ遠西ノ名哲古今異同ノ經驗藥説歴歴トシテ始テ該博詳備ニシテ示其精要ヲ失ハス。素夏書ヲ曬スノ日偶舊篋ヲ探テ其草稿ヲ閲ルニ多年篋底ニ委シテ蠹魚巢ヲ為シ殆ン
宗田藏書

新訂増補和蘭薬鏡　宇田川榛斎訳・宇田川榕菴校補　18巻
文政十一年～天保六年(1828～35)刊本　16冊



榛斎訳『和蘭薬鏡』を榕菴が増訂し、文政十一年から天保六年にかけて6編18巻として刊行した蘭方の代薬を研究した薬物書。薬物として、旧版で扱った12品のほか麗春花・亜麻・遠志・山楊梅・著・大黄・瑞香・甘草・サフラン・酸模・地楡・芍薬・曼陀羅花・煙草・百葉煎などを取り上げている。旧版と比較して、個々の薬物の解説が詳しく、内容を全く一新しているので、新訂版はほとんど榕菴の訳編著と言える。西洋薬物のみを扱った『遠西医方名物考』と並んで、榛斎訳編『増補重訂内科撰要』を利用するための参考書として編述された。本書の成立事情や位置づけについては、宗田一「宇田川家三代の実学－『西説内科撰要』と関連薬物書をめぐって－」(『実学史研究―V』)に詳しい。(遠藤正治)

M/82/Ud　00209966-00209981


新訂増補和蘭藥鏡標目
凡例　十則
内景名物釋
病名釋
製煉藥劑並外用療法名稱釋
引用書目符號
藥秤量器釋並符號
巻一
桂
撰品　種類

文政十三年仲夏新鐫
榛齋宇田川先生著
新訂
増補
和蘭藥鏡
初篇
風雲堂藏版
青藜閣發兌

舎密便覧　　河野禎造訳述　14折　　安政六年(1859)刊　　1帙

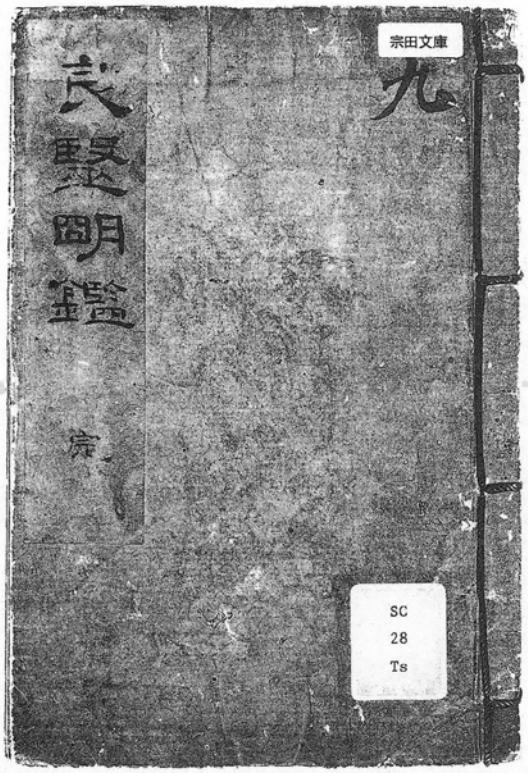
ドイツの分析化学者 Heinrich Rose の“Handbuch der analytischen Chemie”にもとづいて H. Kramer Hommes が著した『定性分析化学表』(Systhematische handleidung of tafelvormig overzigt tot het doen van en ten gebruike bij qualitative, chemisch-analytische onderzoekingen, Amsterdam, 1845）の訳。福岡藩医河野禎造が長崎に遊学してファン・デン・ブルクについて理化学を学んだとき、右の原書を授けられ、これを藩主黒田長溥に献上して、藩の事業として刊行されることとなり、江戸の宇田川興斎に校閲と板刻を依頼して、江戸で刊行された。陽イオン・陰イオンの分別検出法や各種試薬の固有反応が図表でまとめられている。刻者は蕃書調所活字御用出役をつとめた榊篁邨（令輔）。図は手彩色。安政六年（1859）刊行と推定されている。江戸末期の化学分析書として出色のものである。宗田一「河野禎造と『舎密便覧』」(『蘭学資料研究会研究報告』第113号）参照。(遠藤正治)

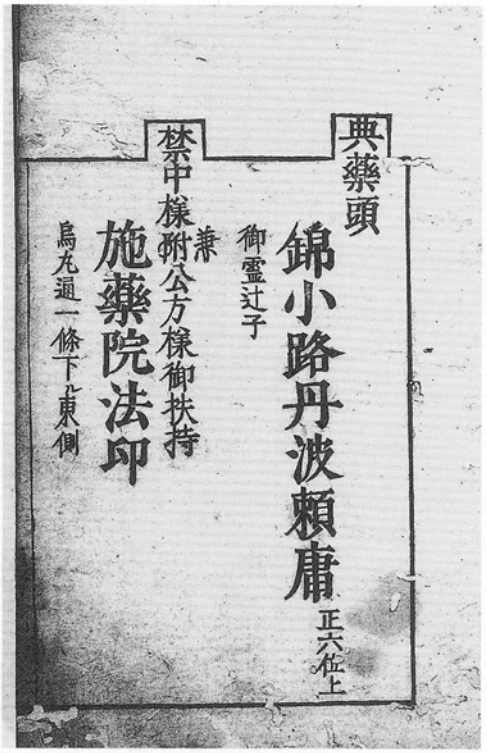
PA/21/Ko　　00215210

良医明鑑　　辻度昭編著　2巻　　正徳三年(1713)刊本　　2冊

編者である辻度昭（勘重良）は京の三条小橋にあった汲古堂という本屋の主人であるが、巻首に記した凡例によれば、京都の町に住む人々が病気になった時、良医の所在を知る便のために編纂したと云う。そのため医家を訪問して掲載の可否を尋ねたが、承諾しない医家もあった。恐らく掲載料の多少によったものであろう。始めに目録として、大人科、小児科、婦人科、鍼医、外科、眼科、口中科、按摩、医書講説人、諸家名方賣薬と記している。各丁に一名宛、身分、専門科目、住所、氏名、合羽印を載せている。総勢151名である。掲載順位として、第一に典薬頭錦小路頼庸、施薬院法印からはじめて、禁裏様、公方様医師を先とし、あとは、北から南へ、東から西へと載せ、最後に諸家名方を記している。このあと出版される医家名鑑（『海内医林伝』、『天保医鑑』、『洛医人名録』）の嚆矢をなすものである。（杉立義一）

SC/28/Ts　　00195117, 00195118

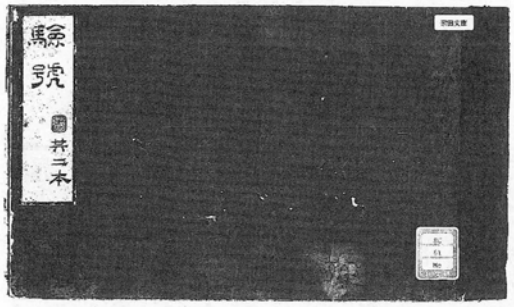




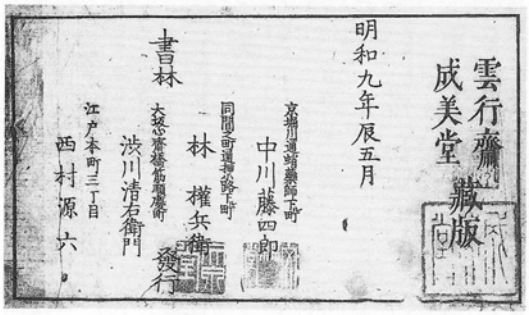
和蘭全躯内外分合図　　本木了意訳／鈴木宗云撰次　験号（本文）と図譜
明和九年（1772）刊本　　2冊

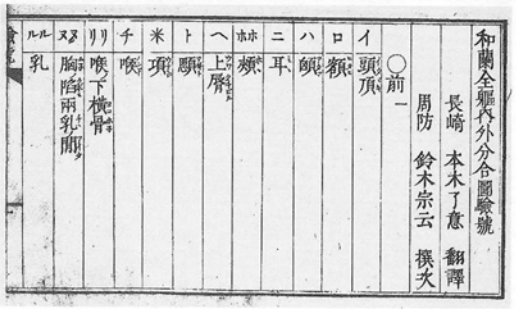
本書はわが国で最初の翻訳された解剖書で稀覯本である。原著は Johann Remmelin の“Pinax Microcosmographicus”（小宇宙鑑）の蘭訳本“Ontleeding Menschelyke Lichaems”（人体解剖）である。通詞本木了（良）意がさる高官から頼まれて翻訳したものであるが、翻訳した時期は天和二年（1682）頃と推定される。本木が翻訳した当初はこの解剖図の価値がわからないために散逸してしまったが、本書は宝暦四年（1754）に人体解剖がはじめて公許された後、この解剖書の価値に気づいた鈴木宗云が残欠本を集めて、発刊したものである。本書が刊行されて2年後に解体新書が出版された。なお、寛政六年（1794）に本書の補刻本が出ている。蔵版者は雲行斎／成美堂で、版元は中川藤四郎（京都）、林権兵衛（京都）、渋川清右衛門（大坂）、西村源六（江戸）である。（酒井シヅ）

SC/61/Mo　　00194360, 00194362



先生又檢女子之藏余
皆與觀焉今也閲此書
率不違衷者所檢云所
謂官失其守學在四夷
抑志士辨惑濯心之時
矣哉
安永壬辰冬
清水剛跋


明和九年辰五月
雲行齋
成美堂　藏版
京都川通蛸薬師上ル
中川藤四郎
同間之町通姉小路下ル町
林　權兵衛
書林
大坂心斎橋筋唐物町
渋川清右衛門
江戸本町三丁目
西村源六
發行

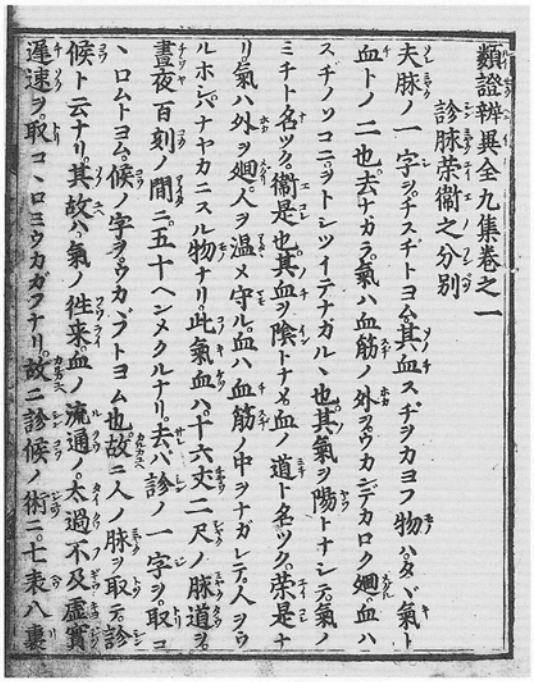

和蘭全躯内外分合図驗號
長崎　本木了意　翻譯
周防　鈴木宗云　撰次
○前一
イ　頭頂
ロ　額
ハ　頤
ニ　耳
ホ　頬
ヘ　上唇
ト　顎
メ　項
チ　喉
リ　喉下横骨
ヌ　胸脇兩乳間
ル　乳

類証弁異全九集　　月湖著　曲直瀬道三増訂　7巻　　寛永十年(1633)刊本　　2冊

月湖の原著、曲直瀬道三（一渓）の増補改訂になる医書。旧本は巻数不定。月湖は室町時代の僧医で、渡明して活躍し、のち渡明した田代三喜に医学を伝授したと伝えるが、詳細は不明。現伝の月湖原著とされる『全九集』は全4巻で漢文体。巻首に景泰三年（1452）陳叔舒序があり、当時中国で出版された旨記されるが、疑わしい。天正17年（1589）古鈔本が伝存する。道三の増改本は全七巻で和文。天文十三年（1544）の成立と伝え、永禄十年（1567）宇喜多直家に奉授した自筆本が現存。道三本は江戸時代初期にはすこぶる広く行われ、刊本には元和～寛永中（1615～43）の数種に及ぶ古活字本や、寛永九年（1632）以降の多種に及ぶ整版本（縦型美濃判および横型半裁本）があり、書誌は複雑。宗田文庫本は道三増改和文の古活字版を底本とし、曲直瀬玄朔の門人・杉田良庵（玄与）が寛永十年に校刊した縦型美濃判で、「新刊一字無訛」とうたってある。（小曽戸　洋）

SC/851/Ge　　00199465, 00199466

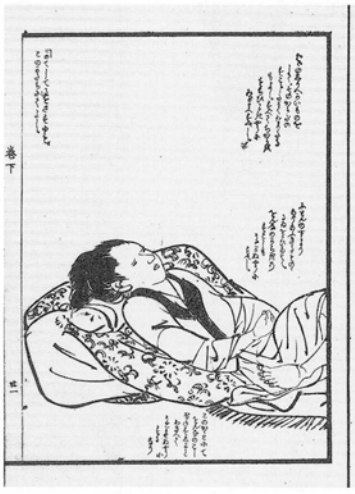
洛下太醫酉院先生
良庵玄與　校正
寛永癸酉孟夏吉辰
類證辨異全九集
新刊一字無訛


類證辨異全九集卷之一
診脉榮衛之分別
夫脉ノ一字ヲチスヂトヨム。其血スヂヲカヨフ物ハタヾ氣ト血トノ二也。去ナガラ。氣ハ血筋ノ外ヲウカヾカロク廻。血ハスヂノソコニヲトシツイテナガルヽ也。其氣ヲ陽トナシ。血ノミヂトヨム。衛是也。其血ヲ陰トナヘ血ノ道ト名ツク。榮是ナリ。氣ハ外ヲ廻。人ヲ温メ守ル。血ハ血筋ノ中ヲナガレテ。人ヲウルホシ。パナヤカニスル物ナリ。此氣血ハ。十六丈二尺ノ脉道ヲ晝夜百刻ノ間ニ。五十ヘンメクルナリ。去バ診ノ一字ヲ取コヽロムトヨム。候ノ字ヲウカヾフトヨム也。故ニ人ノ脉ヲ取テ診候ト云ナリ。其故ハ。氣ノ往来。血ノ流通ノ。太過不及虚實遲速ヲ取コヽロミウカヾフナリ。故ニ診候ノ術ニ。七表八裏

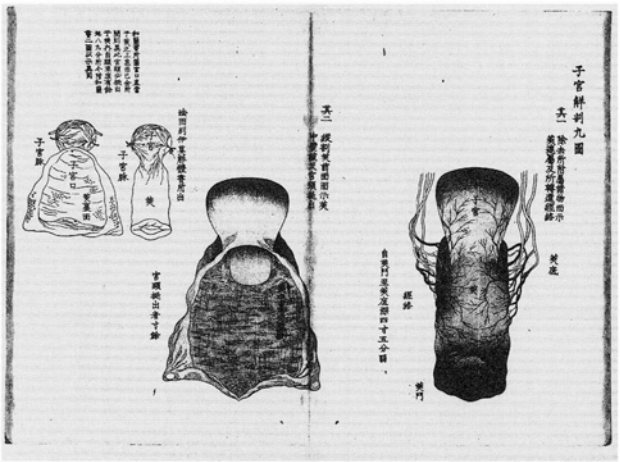
病家須知　平野重誠著　8巻　前篇(巻1～4)　天保四年(1833)・後編(巻5～8)
天保五年(1834)刊本　8冊

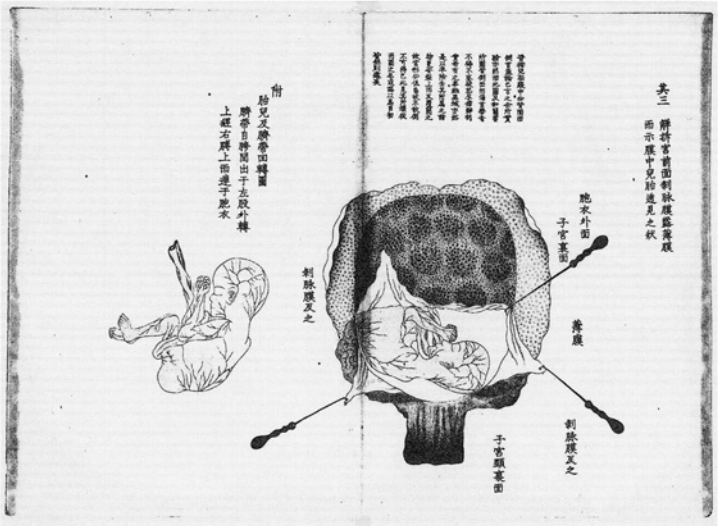
治病にとって、看護は医療と同じ程度に重要である。古来、仏教的、儒教的看護書も稀にはあったが、本書は系統的な一般家人養生兼看護書として本邦嚆矢の書物である。著者平野重誠は多紀氏に学んで江戸両国の薬研堀で開業していた町医であるが、その知識は各科及び産科についても一家言を有していた。内容を見るに、第1巻は摂生、養生の心得、第2巻は食物摂取の注意、第3巻は小児の養育について、第4巻は婦人の平素の心得、妊娠・分娩・産褥における心得及び産婦自身のなすべき事項について、第5巻は梅毒性病が異邦から伝来したわけ、第6巻は傷食、霍乱などへの注意、第7、8巻は『坐婆必研』(とりあげばば心得草)として、産婆に専門技術的なことを教授している。本邦最初の産婆学教本と云うことができる。従って巻7、8は他の巻とは趣が異なるが、合刻二巻として『病家須知』の中に含まれている。宗田文庫本は擇善居蔵版である。(杉立義一)

SC/851/Hi　00199202-00199209



南陽館一家言　　賀川南竜著　賀川晋校　　天保十年(1839)刊本　　1冊





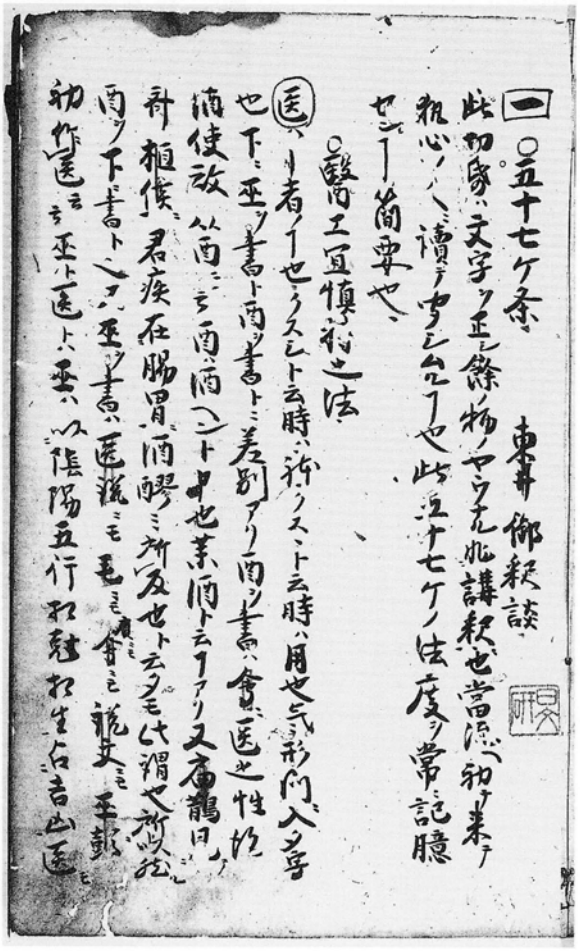
本書は大阪賀川家の第二世賀川南竜の著である。南竜（秀哲1781～1838）は備中倉敷の出身。賀川玄悦の長男有斎の門人であり大坂賀川家を開いた有章の門に入り、その跡を継いだ。大阪でも寛政以後人体解剖が行われるようになった。南竜は婦人生殖器について、西洋解剖書で研究したのち、実際に婦人の解剖を行うこと9回に及んだ。その都度、詳細な解剖所見と解剖図を書きとめた。南竜の没後、天保十年(1839)に三代晋が刊行した。書中、子宮解剖図九図、妊娠六月解剖図三図、子宮息肉二図何れも木版を載せ、明快な解説を附している。南竜の別の著書として『南竜助産論』がある。助産という用語を用いた本邦における最初である。弘化三年（1846）発行の『大坂町請医師名集大鑑』では東の大関の最高位に位置づけられている。本書は美麗で大型の稀観本である。（杉立義一）

SC/851/Ka　　00194370

切紙東井御釈談　　曲直瀬玄朔著　　[江戸前期]写本　　1冊

曲直瀬玄朔の医学講義を筆録した江戸前期の写本。表紙を欠いているので外題は不明。巻首第1行には「一　五十七ヶ条　東井御釈談」とある。内容を検討すると、本書は曲直瀬道三（一渓）の『切紙』を養嗣子・玄朔が講義し、それを門人が筆録、整理して一書となしたものであることがわかる。講義に用いられた『切紙』は刊本となる以前の、道三の原本か、もしくはそれに近いもの。通行刊本では第一篇「五十七箇条」から第二十七篇「補瀉之配剤」までに該当する部分が詳細に解説されている（当該本は刊本の第三・四篇を分けず第三篇としてあるので、「補瀉之剤」は篇数が一つくり上がって第二十六篇となっている）。さらに末尾には天正九年（1581）八月十二日、一渓（道三）御釈談の「脈訣刊誤撮要」10葉が付してある（これは刊本『切紙』の最終篇に該当）。本書は他に伝本の存在を聞かず、あるいは孤本か。『切紙』の伝承経緯、さらには道三・玄朔の医学思想をうかがううえで貴重な史料といえる。（小曽戸　洋）

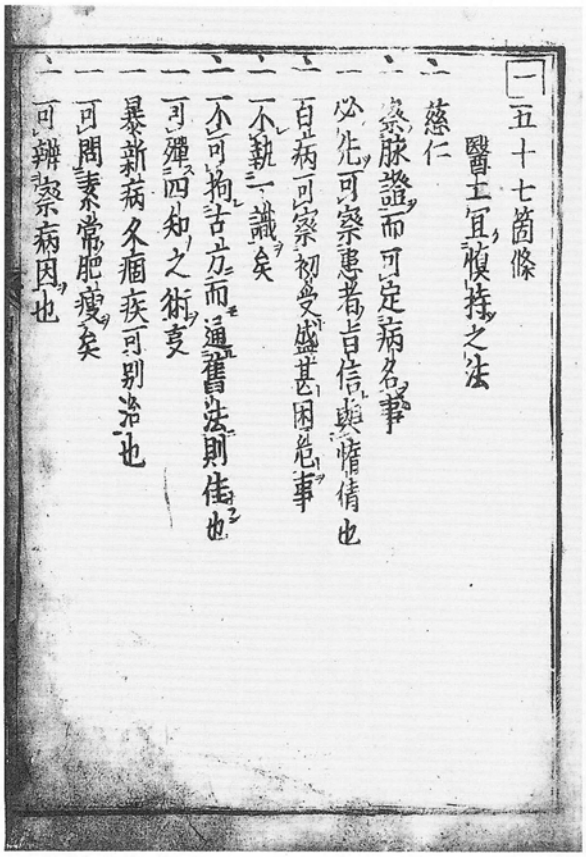
SC/851/Ma　　00194364



切紙　　曲直瀬道三著　2巻　［慶安二年(1649)］刊本　　2冊

曲直瀬道三（一渓）の著になる医学の基本要訣集。もと道三が天文七年（1538）から天正九年（1581）にかけて弟子達に医学の秘訣を記して伝与した紙片を、のちに整理して1書となしたもの。自筆の紙片や古鈔本も現存している。通行の刊本は全2巻で、上巻には「五十七箇条」から「察胎」まで21篇、下巻には「建中」から「脈訣刊誤撮要」まで20篇、計41篇を収める。刊本には、江戸前期無刊記本（数種）、寛永二十年（1643）刊本、慶安二年刊本などがあり、江戸前期に流布した道三代表作のひとつ。宗田文庫本は無刊記であるが、慶安二年版の後印本と思われる。（小曽戸　洋）

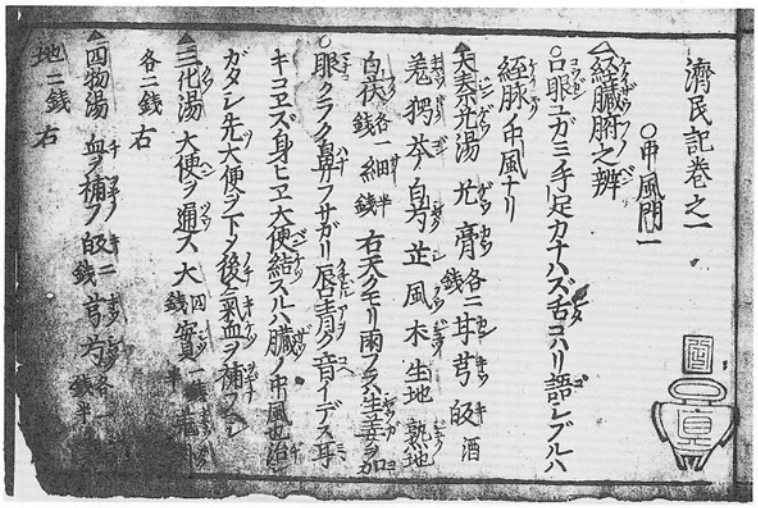
SC/85/Ma　　00194408, 00194409



済民記　曲直瀬玄朔著　3巻　寛永八年(1631)刊本　1冊

曲直瀬玄朔の著になる医方集。天正元年（1573）成。刊本には元和三年（1617）古活字版をはじめ、寛永中（1624～43）の無刊記整版、寛永八年（1631）・慶安四年（1651）・明暦四年（1658）整版などいくつもの版種があり、江戸時代前期に広く流布した。末尾に天正元年付の跋があり、「紀州の粉河寺において、王永輔『恵済方』・虞天民『医学正伝』などから抜粋し、俗語（和文）をもって初学者のために編纂した」旨の記載がある。刊本には著者名を記さないが、玄朔の名を明記した古鈔本が存在するので、本書は玄朔25歳時の著作であることが知られる。上巻には中風から癲癇まで21門、中巻には諸虫から牙歯まで30門、下巻には外科14門、婦人科６門、小児科７門につき、簡明な治方を記載している。宗田文庫本は寛永八年（1631）の杉田良庵（玄与）校刊本。（小曽戸　洋）

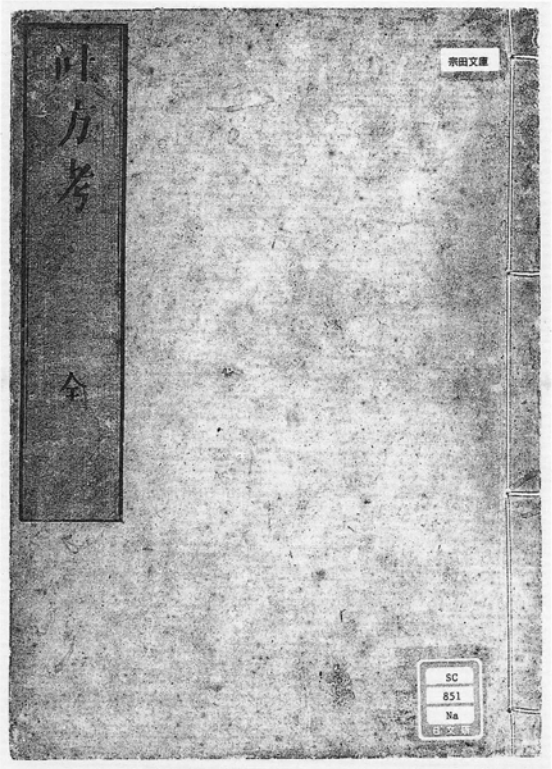
SC/851/Ma　00195145

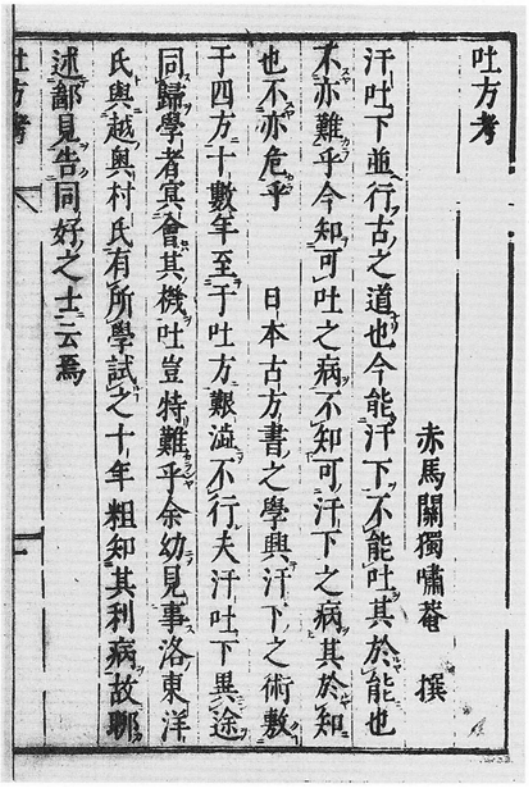


吐方考　　永富独嘯庵著　　宝暦十三年(1763)刊本　　1冊

永富独嘯庵（1732～66）の著になる医書。宝暦十二年（1762）の山脇東洋の序、翌十三年の清水伯毅（剛）の跋を付して同年刊。独嘯庵は長門国赤馬関（下関市）の人で、名は鳳、字は朝陽、通称昌安、のち鳳介。医師永富氏の養子となり、18歳のとき京の山脇東洋に入門。東洋は古方の汗・下法に巧みであったが、吐方に通ずるため、当時吐方に詳しかった越前の奥村良竹のもとに、独嘯庵と嫡男の東門を派遣し、学ばせた。その成果が本書である。本書を執筆した同じ年に長崎に遊び、吉雄耕牛について蘭学を修めた。偏見を排し、東洋流の古方を軸としつつも、他流の採るべきところは採り、蘭方にも深い興味と理解を示した。医学のほかに製糖に関する仕事も残しており、早逝したが、門人や著書を通じて後世に少なからぬ影響を及ぼした。『漫游雑記』の著作も有名。門人に儒者の亀井南冥や蘭方医の小石元俊などがいる。宗田文庫には計３部の同版本がある。（小曽戸　洋）

SC/851/Na　　00194945




吐方考

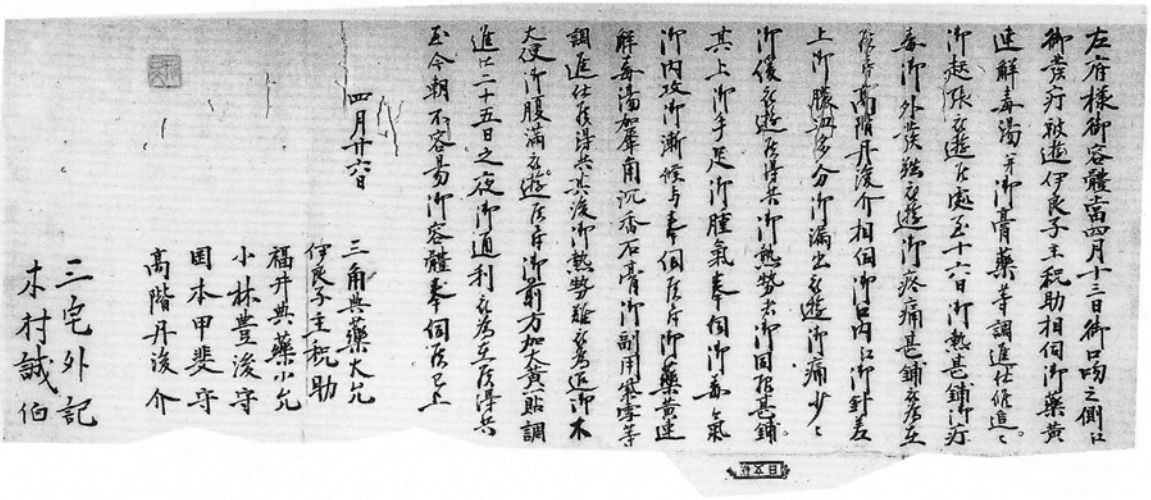
赤馬關獨嘯菴　撰

汗吐下並行古之道也今能汗下不能吐其於能也不亦難乎今知可吐之病不知可汗下之病其於知也不亦危乎　日本古方書之學與汗下之術數千四方十數年至于吐方艱澁不行夫汗吐下異途同歸學者冥會其機吐豈特難乎余幼見事洛東洋氏與越奥村氏有所學試之十年粗知其利病故聊述鄙見告同好之士云爲

初度御容體書　　三角典薬大允他著　1枚　　弘化四年(1847)写

左大臣（二条斉信か）が面疔をわずらい治療を受けるが、重態に陥った経過を記した典薬寮医師の容体書。主に治療を担当した典医は外科の名家伊良子主税助（光通）と高階家支流で本道及び外科の治療巧者といわれた高階丹後介（経支）である。典医6名、伊良子主税助・高階丹後介のほか三角典薬大允（有裕）・福井典薬小允（棣園）・小林豊後守（具訓）・岡本甲斐守（保之）の連署と町医2名、三宅外記・木村誠伯の連署がある。4月26日付で、年記はないが、右の典医らの任免・没年から推定して、左大臣二条斉信が薨去した弘化四年のものであろう。おそらく原本ではなく、大和高取藩の藩医服部周医が、藩主の治療の参考にするため書き取った写しと思われる。江戸期の典薬寮医師の医療活動を伝える数少ない史料の一つである。（遠藤正治）

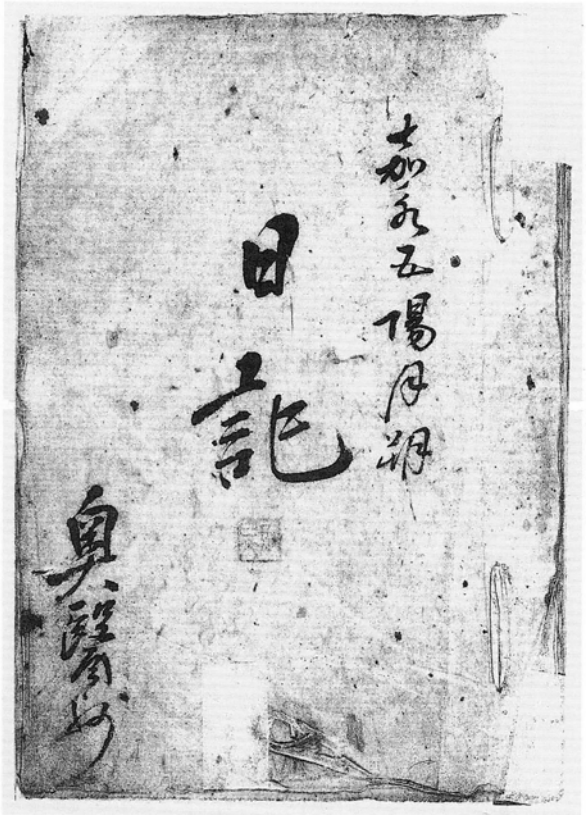
SC/851/Ya　　00209556

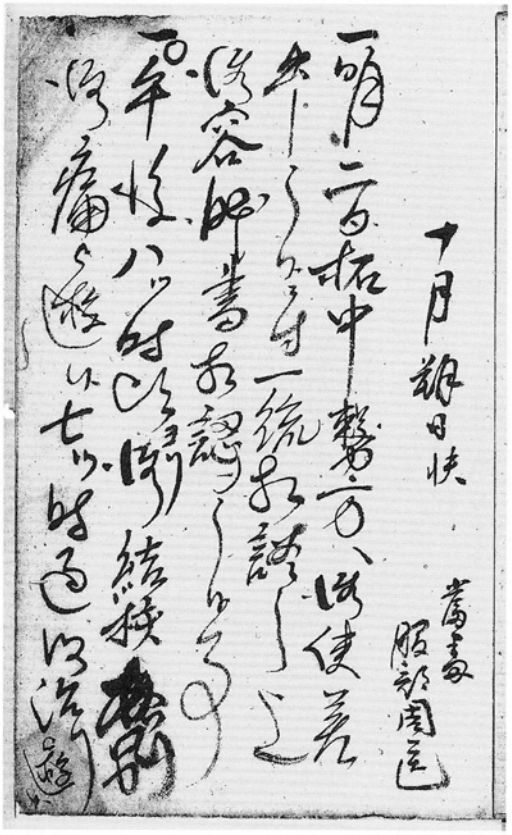


日記　　大和高取藩奥医師著　　嘉永五年(1852)写　　1冊

大和高取藩々主植村家貴が瘰癧に冒された際、当直・拝診した奥医師（藩医）の当番日記。嘉永五年（1852）十月一日から二十二日までを記録している。当番の藩医は服部周医・佐倉玄尚・下河辺道伯・佐倉玄順・服部宗賢の五名で、うち下河辺道伯は蘭方医である。家貴の病状はかなり難症であったので、漢方だけに頼らず、蘭方を併用して、治療がなされていたことが知れる。しかし、治療の効果なく、家貴は嘉永六年（1853）二月二十三日、年47で死亡する。（遠藤正治）

SC/851/Ya　　00209557



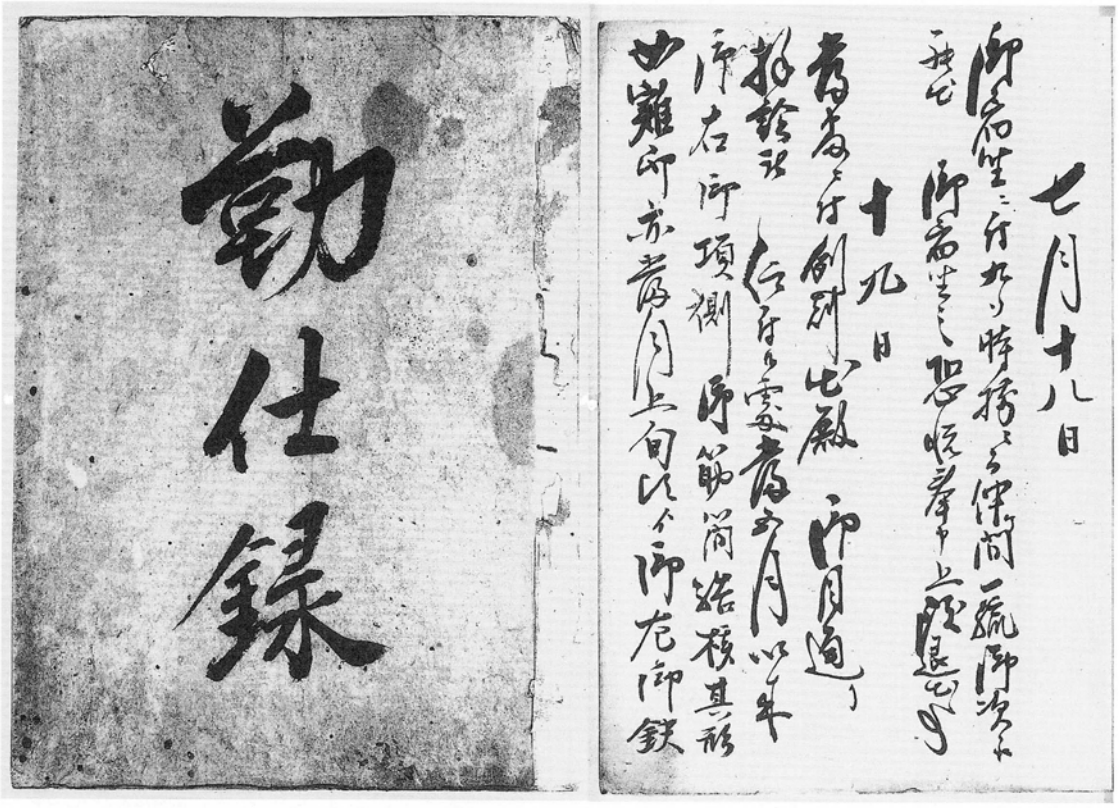


勤仕録　服部周医著　嘉永五年(1852)写本　1冊

前書『日記』と同じく大和高取藩々主植村家貴が瘰癧に冒された際の藩医服部周医の勤務日記。嘉永五年七月十八日から十月十五日に至るもの。家貴の難症の治療法を探すため、藩医一同の進言により、京・大坂に赴き、治療巧者といわれた高階経支や華岡氏を訪ねて処方を求めた経緯が記されている。また、漢方での治療が不調におわり、下河辺道伯と相談し蘭方を併用して治療に当たった経緯も記されている。前書『日記』とあわせて幕末の漢蘭併用の治療の実態を伝える興味深い史料である。

(遠藤正治)

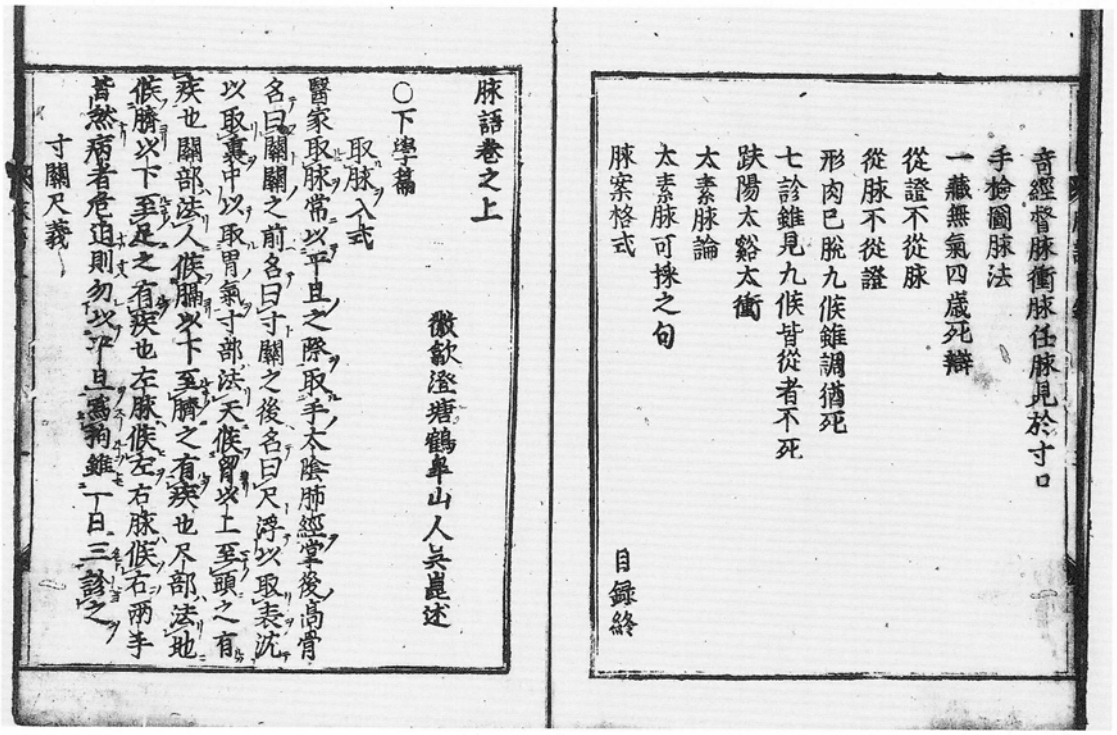
SC/851/Ya　00209558



脈語　　呉崑著　2巻　　元和五年(1619)刊本　　1冊

明の呉崑の著になる脈学書。呉崑は安徽の歙県の人で、字は山甫、号は鶴皐・参黄子。万暦中に活躍したが、生没年は不詳。『医方考』『黄帝内経素問呉註』の著者としても著名。『医方考』は万暦十二年（1584）の成立、同十四年（1586）の初刊。『脈語』の成立は『医方考』に数年先行するが、刊行はほぼ同時。この二書は刊行後まもなく日本に舶載、また刊行されてわが国の医学に大きな影響を与えることになった。『脈語』の日本刊本には、慶長七年（1602）古活字版、同十三年の古活字版、元和五年の古活字版（あるいは無点の整版の誤認か）、同年刊の整版（有訓点）などがある。宗田文庫本は元和五年、梅寿重刊有訓点整版の後刷（寛永前期頃の印本か）。しかし宗田文庫中では最古版の一つに属するであろう。刊行者の梅寿（宗和）は吉田宗恂の門人で、医師であるとともに、医書を中心とした出版活動を江戸初期さかんに行った。（小曽戸　洋）

SC/855/Go　　00209506


奇經督脉衝脉任脉見於寸口
手檢圖脉法
一藏無氣四歳死辯
從證不從脉
從脉不從證
形肉已脫九候雖調猶死
七診雖見九候皆從者不死
趺陽太谿太衝
太素脉論
太素脉可揉之句
脉案格式
目録終

脉語卷之上
歙欽澄塘鶴皐山人呉崑述
○下學篇
取脉入式
醫家取脉常以平旦之際取手太陰肺經掌後高骨名曰關關之前名曰寸關之後名曰尺浮以取表沈以取裏中以取胃氣寸部法天候胃以上至頭之有疾也關部法人候膈以下至臍之有疾也尺部法地候臍以下至足之有疾也左脉候左右脉候右兩手皆然病者危迫則勿以平旦爲期雖一日三診之
寸關尺義

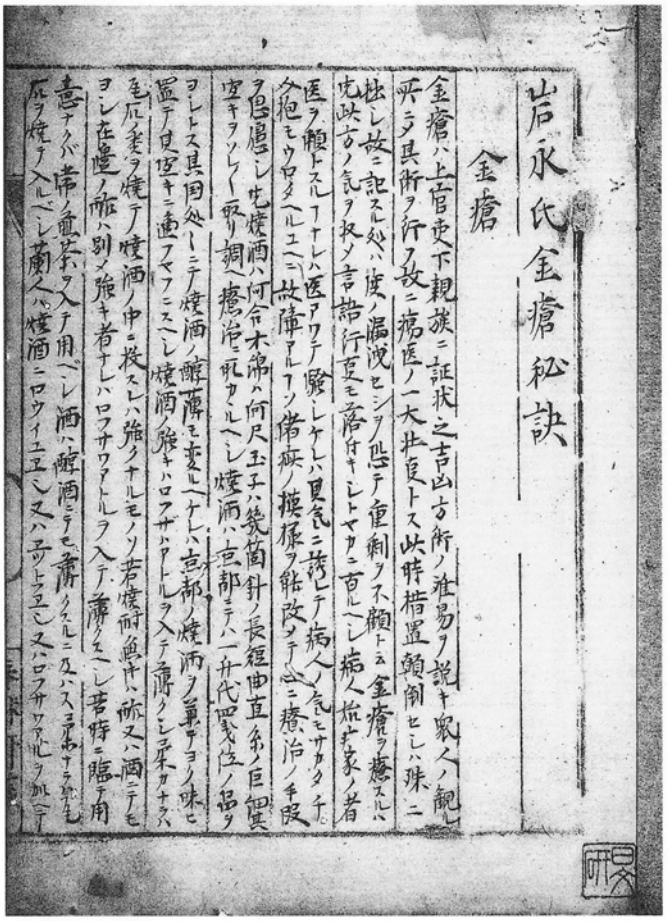
岩永氏金瘡秘訣・瘍医新書手足切断篇

ヘーストルシルセイン著／馬場貞由訳／
大槻［玄幹］筆　2巻13丁　　文化十一年（1814）刊本　1冊

題箋は「金瘡秘訣・瘍科新書手足切断篇」とある。内題がふたつあり、その一が「岩永氏金瘡秘訣」である。岩永氏は長崎の医師、巻末に「文化甲戌（十一年）仲秋謄写干洛陽寓居　川口重孝識」とある。その二は「瘍医新書手足切断篇」、西洋ヘーストルシルセイン著　東洋長崎　馬場貞由訳、仙台大槻茂順筆とあり、巻末に「文化十有一稔仲秋日謄干洛陽寓居」とある。本書は岩永外科の講義録と、馬場貞由（佐十郎）が訳したハイステル（Heister）外科書の四肢切断術の部分を大槻玄幹が筆録したものを川口重孝が転写したものとからなる。宗田文庫本は両者を合冊した写本である。筆写したのは川口士幹（重孝）、文化十一年（1814）に京都の寓居で写しているが、用箋の柱に華岡青洲の堂号「春林軒蔵」とある。

原著ハイステル外科書は吉雄耕牛が講義・診療にもっぱら用いたが、この訳書に杉田玄白が訳した『瘍科大成』、弟子大槻玄沢に翻訳を命じた『瘍医新書』などがあるが、通詞馬場貞由（1787～1822）が訳し、大槻茂順が、洛陽で筆記したものは珍しい。（酒井シヅ）

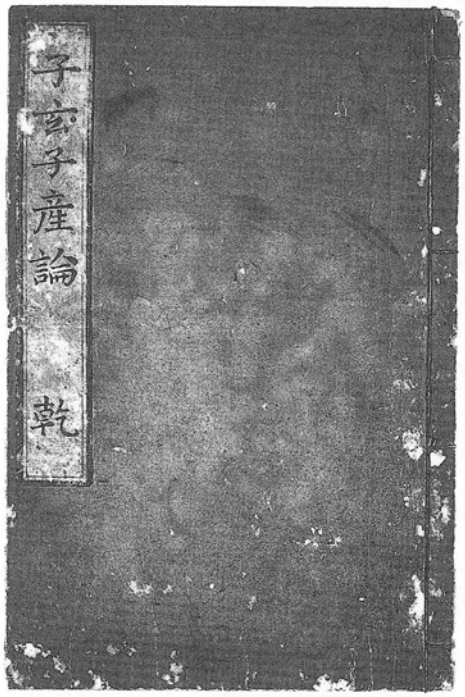
SC/857/He　　00196683


岩永氏金瘡秘訣

金瘡

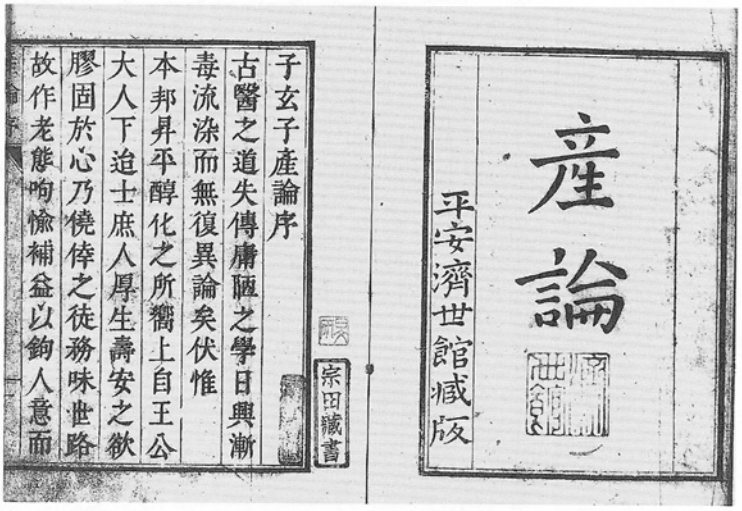
金瘡ハ上官吏下親族ニ証状之吉凶方術ノ准易ヲ説キ衆人ノ配
所ヲ具術ヲ行フ故ニ瘍医ノ一大壮良トス此時措置顧例セシハ殊ニ
怯シ故ニ記スル処ハ使ノ漏洩セシヲ恐テ重剰ヲ不顧トス金瘡ヲ療スルハ
先此方ノ気ヲ扶メ吉詰行度モ落付キシトヤカニ直ルシ病人拾弐家ノ者
医ヲ頼トスルヲナレハ医アワテ驚シケレハ見気ニ拘ヒテ病人ノ気モサカタチ
久抱モウロタヘルユヘニ故障アルヲン備疾ノ按療ヲ能改メテ〻ニ療治ノ手段
ヲ息慮シ先焼酒ハ何合木弗ハ何尺玉子ハ幾箇針ノ長程曲直糸ノ巨細其
空キヲソレ〻取り調ヘ療治ニ取カヽルヘシ焼酒ハ京都ニテハ一升代匁位ノ品ヲ
ヨレトス其国処〻ニテ焼酒ノ醇薄モ変ルヘケレハ京都焼酒ヲ単ヲノ味ヒ
置テ見空キニ盃アマフニスヘシ焼酒ノ強キハロアサハアトルヲ入テ薄クシテ呆カナクハ
毛瓜麦ヲ焼テ焼酒ノ中ニ投スレハ強クナルモノソ若焼酎魚汁ハ麻又ハ酒ニテモ
ヨシ在陸ノ麻ハ別メ強キ者ナレハロアサアトルヲ入テ薄クスヘシ若特ニ臨テ用
意ナクバ帯魚茶ヲ入テ用ヘシ酒ハ醇酒ニテモ薄クスルニ及ハス三度ホトリ茶毛
瓜ヲ焼テ入ルヘシ蘭人ハ焼酒ニロウイユヘシ又ハロアサアルヲ加テ

子玄子産論　賀川玄悦著　賀川玄迪校　4巻　明和二年(1765)刊本　2冊



本書はわが国の実証的産科学（賀川流産科）を創始した賀川玄悦（字は子玄、1700～1777）の業績を総括したものである。玄悦は彦根の産、はじめ鍼灸、按摩を習ったが、医師を志して京都に行き、特別の師につかないで独学で産科を研究した。たまたま遷延横位で死に瀕した母体の生命を救って（回生術）から、難産には薬物より手術が有効なことを悟った。正常胎位（上臀下首）の発見、回生術・鈎胞はじめ幾多の手術的方法の創案、さらに腹帯、産椅などの旧弊の打破につとめた。これらを『産論』四巻にまとめるに当たり、儒者皆川淇園の助力は大きく、明和二年九月、初めて刊行した。それ以後、『産論』によりわが国の産科学は一変して、中世的手法から脱して近代的実証的となった。幕末までに多くの版を重ねた。宗田文庫本はその初版である。巻4の末尾に附録として治験四十八則と玄悦の略歴を付している。（杉立義一）

SC/857/Ka　　00209542, 00209543

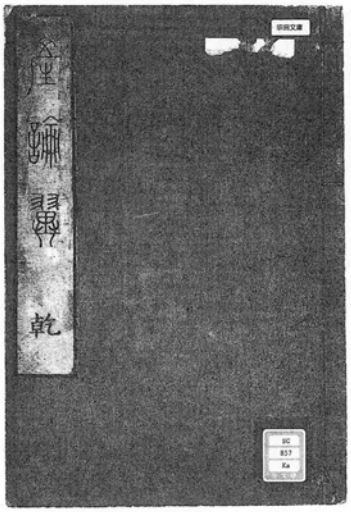


産論翼　賀川玄迪著　2巻　安永四年(1775)刊本　2冊

賀川玄悦の著わした『子玄子産論』は、刊行以来、全国の産科医の教本となったが、不備な点も多々あった。玄悦の高弟であり養嗣子となった賀川玄迪（字は子啓、出羽国横堀出身、1739～79）は、自ら得た所見、治方をもとにして、按腹、整胎、禁暈、整横など20項目について詳述して（乾巻）、『産論』を補翼した。さらに坤巻では懐孕図（正産、倒産、横産、攣胎など）32図を載せている。このような懐孕図はわが国では最初であり、また当時輸入した西洋産科書にもその原形はなく、玄迪一門の独創によるものと考える。『翼』の序文は柴野栗山が、後跋は、山脇東海が書いている。また凡例（門人　佐佐井玄敬撰）によれば、回生、鈎胞の二術は『産論』では悪影響を恐れて詳述しなかったので『翼』には手術法を載せようと考えたが、やはり門に入ることはできても、室に入ることは困難なこともあるので、『翼』でも詳述していない。志のある人は入門して直接学んでほしいと述べている。安永四年(1775)に刊行以来、『論』と『翼』とは一体となって版を重ねた。

（杉立義一）

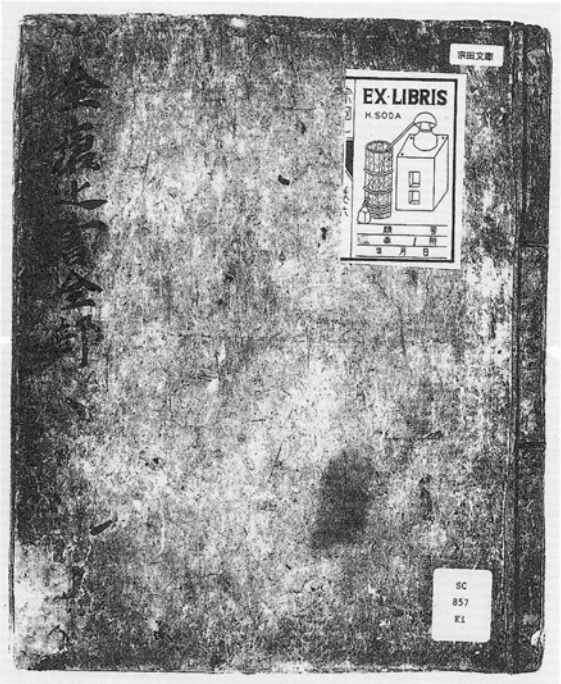
SC/857/Ka　00195373-00195374

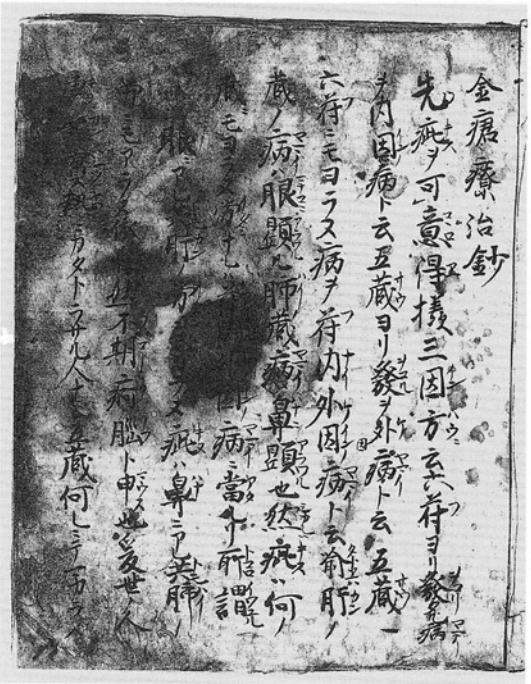


金瘡療治鈔　　[室町末期頃]写本　　1冊

南北朝（14世紀末）に成立した金創（金瘡とも）、切創をはじめとする外科疾患の療治書。日本では南北朝の戦乱期に金創医が輩出。本書は当時の医方を伝える書で、宗田一『図説日本医療文化史』（93～94頁）も本書の図版を載せ、解説されている。それによると延文元年（1356）の成稿で、応永二年（1395）の相伝本。芳賀清左衛門尉・草山宗右衛門尉などに伝えられていったものという。本書の形態・字体などから推すと、室町後期、16世紀中後期の写本かと思われ、宗田文庫中では最も古い写本といえるであろう。室町時代には南北朝の金創医を承けて、神農流・畠山流・針井流・浅見流・小笠原流など数々の流派が現われ、『金瘡書』『金瘡秘伝』『金瘡秘伝書』『金瘡秘伝集』『金瘡一流秘伝』などと称する写本が多く作られた。宗田文庫の『金瘡一部之事』『神農以来秘伝之書』などもその類である。（小曽戸　洋）

SC/857/Ki　　00194376

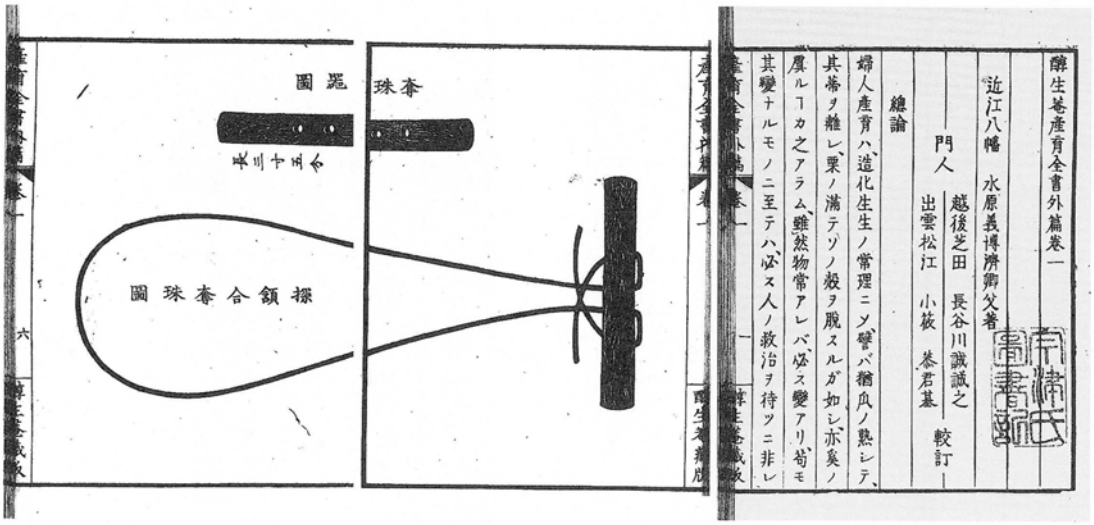




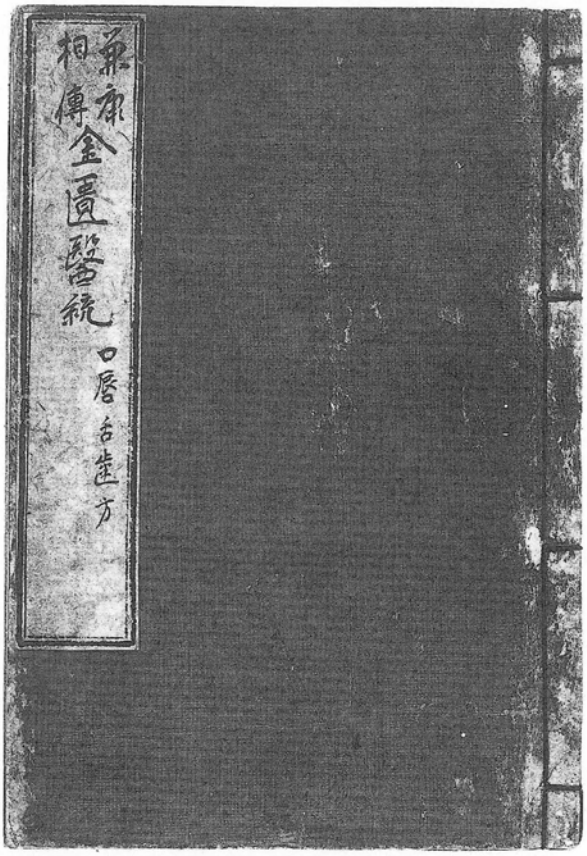
産育全書　水原義博著　11巻、附録1巻　嘉永三年(1850)刊本　12冊

賀川玄悦が創案した回生術は、その後多くの産婦の生命を救ったが、胎児は既に死亡しているとはいえ、悲惨な状態であった。そこで多くの産科医は母児双方の健全な出産をめざして努力を重ねた。近江八幡出身の水原義博（号三折、1782～1864）は、若くして京都に行き、産科、本道、蘭学を学んで帰郷して医業を開いた。その傍ら母児双全を目指して研鑽を重ねた。三折はながす鯨のひげ歯を用いて円紐を作り、これを胎児の頷にひっかけて索引して娩出させた。これを探頷器と名づけ、京都に移住して、探頷術を多くの門人に教授した。さらに嘉永三年（1850）には本書を刊行した。外篇7巻には婦人の解剖生理、妊娠分娩、産後病の治療法を記し、内篇3巻ならびに試験方には探頷器その他の器具の使用法を記し、附録には婦人性器、胎児、胎盤の解剖図をのせている。当時としてはわが国での最高の産科書である。（杉立義一）

SC/857/Mi　00195259, 00195261–00195269, 00195271, 00195272



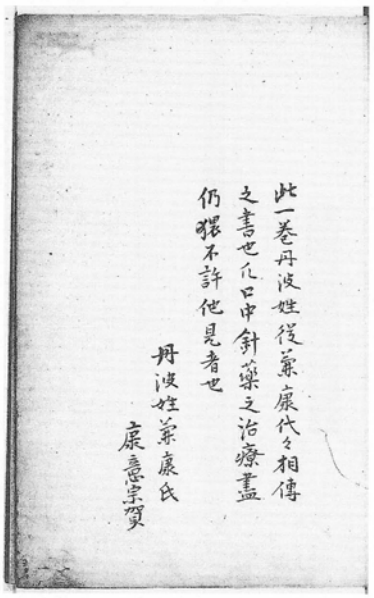
兼康相伝金匱医統（口唇舌歯方）　［江戸後期］写本　1冊



口腔および歯科に関する診断治療法を記した医書。平安時代の名医である丹波康頼の子孫、丹波冬康（14世紀初）は口歯科に優れ、その孫の兼康、甥の親康の家系はそれぞれの名を氏として、代々、口科をもって知られた。この二家の口中療治に関する秘伝書を総称して『口中秘伝』ともいう。兼康口中科の治方を伝える書として『兼康氏秘伝方』『兼康家口中秘伝之書』『兼康歯書』『兼康口中療法秘要』などがあり、親康口中科には『典薬丹三位親康秘伝』『口中治療方』などがあって、テキストは一定しないが、内容は大同小異といわれ、室町・安土桃山時代の撰述になるものである。病症の記載は当時日本に輸入され広まった金元の李朱医学に典拠し、それに独自の臨床経験を加えたものと考えられる。宗田文庫本の本表紙外題は『金匱医統』と称するが同流の書。書写年代は江戸時代後期であろう。茶色厚表紙は明治以降の後補。その題箋（外題）もむろん近代の後補である。

（小曽戸　洋）

SC/857/Ta　00198631


此一卷丹波姓從兼康代々相傳
之書也凡口中針藥之治療盡
仍猥不許他見者也
丹波姓兼康氏
康意宗翼

唇之部
夫唇者脾之候也脾胃受邪則唇之為病蓋燥
則乾熱則裂色赤或腫風則瘙動或喎寒則褐
色青或噤气鬱則主麻血枯則濇而無色濕熱
則唇濡濕爛風熱則唇生瘡殺赤唇腫起白皮
皺裂如蚕繭名曰繭唇有唇腫重如繭者有
本細末大如繭如瘤或因七情動火傷血或因
心火傳授脾経或因厚味積熱傷脾大要審本
病案証補脾気生脾血則燥自消火自除風

中条流産科全書　　戸田旭山撰　　安永七年(1778)刊本　　1冊

本書の編者である大阪の儒医戸田旭山（1696～1769）は、江戸の村山林益が寛文八年（1668）に刊行した『中条流産前後』を補足して『中条流産科全書』として宝暦元年（1751）（自序あり）に仮名まじり文で出版した。中条流産科とは仙台藩医中条帯刀が慶長年間に金創医より発展させた産術であり、帯刀が支倉常長やキリシタン宣教師とも懇意であった関係から学んだのか、タンポ療法等西欧の影響がみられる。宗田文庫本は安永七年（1778）の出版になり、縦小型版で携帯に便である。本味、産前、産後方、各々百数十条の処置方を記している。実証的ではあるが、効能の方はおぼつかない。胎児を娩出させる事ができない場合は、握り薬、腐り薬を用いた。この点から江戸時代末期に産婆が堕胎に応用するようになり、中条流即堕胎術の汚名を得ることとなった。本書には小児方、また板坂流、乗付流、瀬之尾流産術についても記している。なお一般に「ちゅうじょう流」というが本書では「なかでう流」と読みがなを附している。(杉立義一)

SC/857/To　　00198302

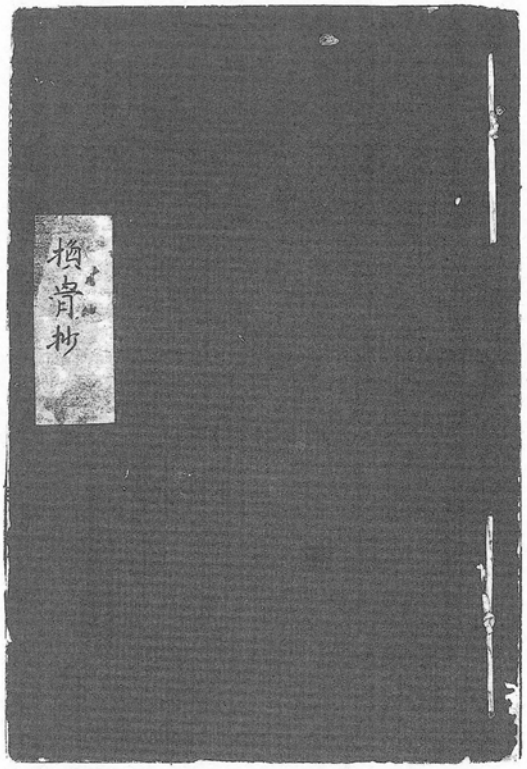
戸田旭山先生撰
中條流産科全書
攝陽　書舗　定榮堂梓

序　玄林堂
夫婦人有経産也。舉世是為難産。
矣故自古醫有十三科而大科為
其最。亦別設婦人科以列于其數。
雖均之可任大科裁其所以別之
者。以有夫経産故也。竊以雖常産

予嘗撰中条家産書小冊令書肆某氏梓
焉其書大行于世而猶慮其多遺漏再探
櫝中撰切日用者数十余與之欲以小補
於産科者流云爾
村山林益撰

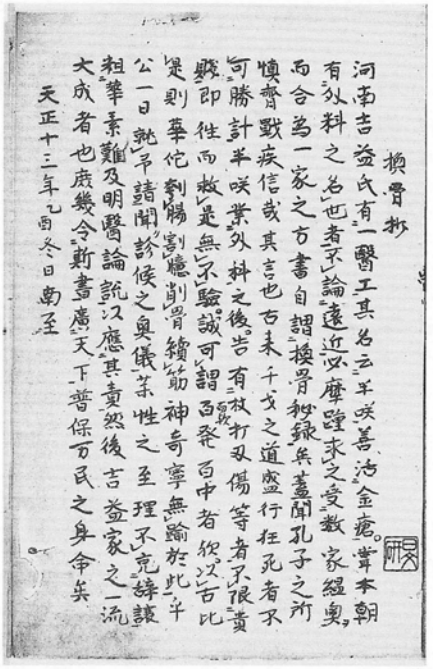
附録
夢生之説　物理小譜以此為悶寂生

換骨抄　宝暦三年(1753)写本　1冊

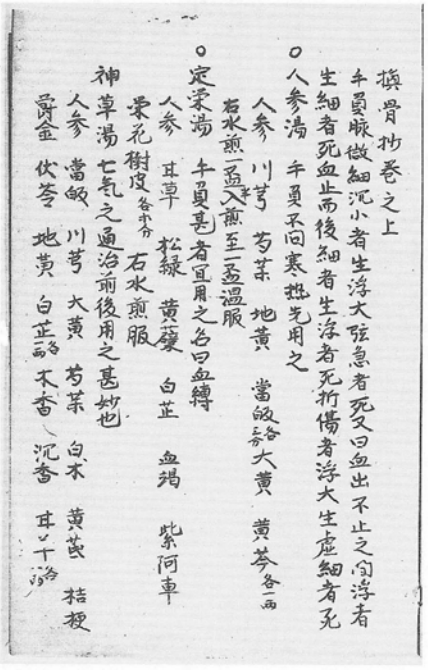


吉益半咲の著になる金創療治（外科）書。『換骨秘録』とも称する。半咲（半咲斎とも）は安土桃山～江戸初期の人であるが、生没年は不詳。名は助秀。もと畠山氏で、兵乱を避けて医に転じたという。吉益東洞とはその祖を共有するが、東洞は半咲の子孫ではない。本書には天正十三年（1585）の曲直瀬玄朔の序が付されているから、それ以前、さほど遡らぬ頃の成立。半咲はかつて玄朔について診候の奥儀、薬性の至理を学んだという。本書は刊本とはならず、写本として後世に伝えられた。伝本はさほど多くはない。ちなみに現代漢方でよく用いられる女神散の原方である安栄湯は、本書を出自とする。宗田文庫本は比較的後世の写本で、正徳六年（1716）吉益主馬助匡明らの相伝本を、さらに宝暦三年に転写したもの。（小曽戸　洋）

SC/857/Yo　00197762


換骨抄

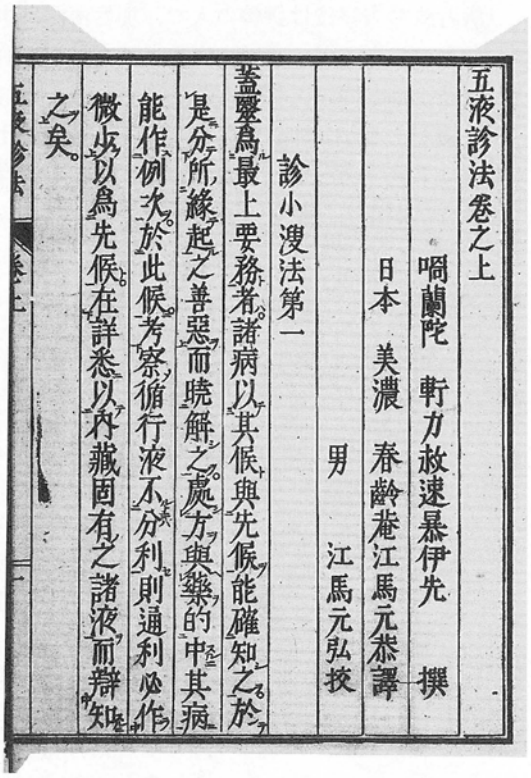
河内吉益氏有一醫工其名云半咲善治金瘡當本朝
有外科之名也者不論遠近必摩踵求之受數家經奥
而合為一家之方書自謂換骨秘録兵蓋聞孔子之所
慎齊戰疾信哉其言也古未千戈之道盛行狂死者不
可勝計半咲業外科之後告有枝折刃傷等者不限貴
賤即往而救是無不驗誠可謂百発百中者然以古比
是則華佗剖腸割臆削骨續筋神奇寧無踰於此乎
公一日就予請聞診候之奥儀茶性之至理不克辭讓
粗筆素難及明醫論説以應其責然後吉益家之一流
大成者也庶幾令斯書廣天下普保万民之身命矣
天正十三年乙酉冬日朝至

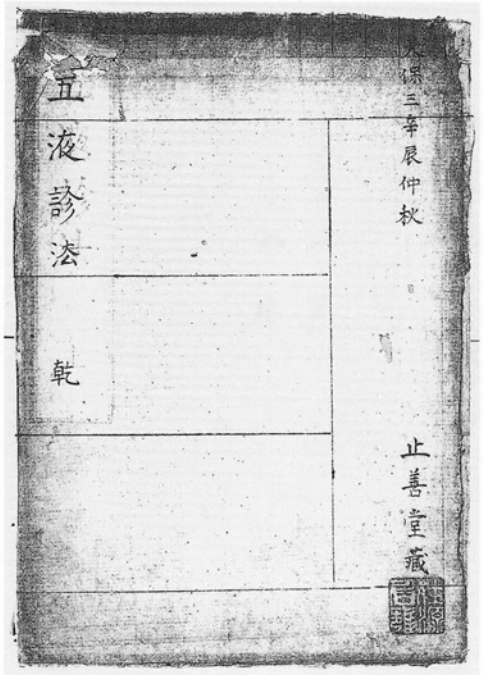

換骨抄卷之上
手負脈微細沉小者生浮大弦急者死又曰血出不止之脉浮者
生細者死血止而後細者生浮者死折傷者浮大生虚細者死
○人参湯　手負不回寒熱先用之
人参　川芎　芍茶　地黄　當歸各等分　大黄　黄芩各一両
右水煎一盃入煎至一盃温服
○定柔湯　手負甚者宜用之名曰血縛
人参　甘草　松緑　黄蘗　白芷　血竭　紫河車
栗花　樹皮各半分　右水煎服
神草湯　七気之通治而後用之甚妙也
人参　當歸　川芎　大黄　芍茶　白朮　黄芪　桔梗
鬱金　伏苓　地黄　白芷　木香　沉香　甘草十両

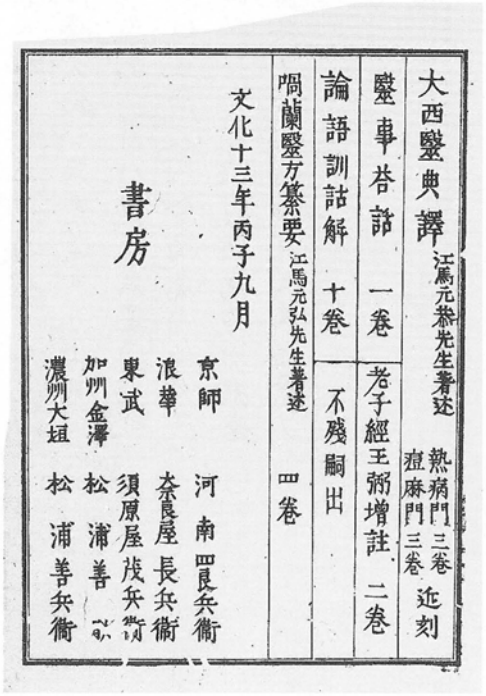
五液診法　　軒力救速・暴伊先撰　江馬元恭訳　2巻　　文化十三年(1816)刊本　　2冊

本書は大垣の蘭方医江馬元恭が、オランダの医師ボイセンの人体の排泄物についての論“Henrix Buysen: Verhandelinge van Uitwerpingen des Menschelyke Lighaams, 1731.”を翻訳したものである。江馬元恭（1747～1838）は大垣藩医であるが、46歳の時、江戸に行き杉田玄白、前野良沢に蘭学を学んだ。良沢は本書の翻訳を元恭に命じた。元恭はこれを筆写して大垣に帰り、蘭学塾、好蘭堂を開き門弟を教導する傍ら、遂に翻訳を完成し、『五液診法』と命名して文化十三年（1816）刊行した。五液とは、尿、大便、汗、唾液、吐物の五種の排泄物のことを云い、その性状を検して病の診断をはかる意図であり、東洋医学にはかつて存在しなかった。ただ長崎の吉尾耕半はこのうち尿の項のみを翻訳した『因液発備』を文化十二年（1815）に刊行しているから『五液診法』は、本邦第2番目の洋方診断学書となる。宗田文庫本の図書は薄い和紙に包まれており、それに、天保三仲秋　止善堂蔵と墨書してある。（杉立義一）

SC/871/Bu　　00198763, 00198764


五液診法卷之上
喝蘭陀　軒力救速暴伊先　撰
日本　美濃　春齢菴江馬元恭譯
男　江馬元弘校
診小溲法第一
蓋醫爲最上要務者諸病以其候與先候能確知之於是分所緣起之善惡而曉解之處方與藥的中其病能作例次於此候考察循行液不分利則通利必作微少以爲先候在詳悉以內藏固有之諸液而辯知之矣

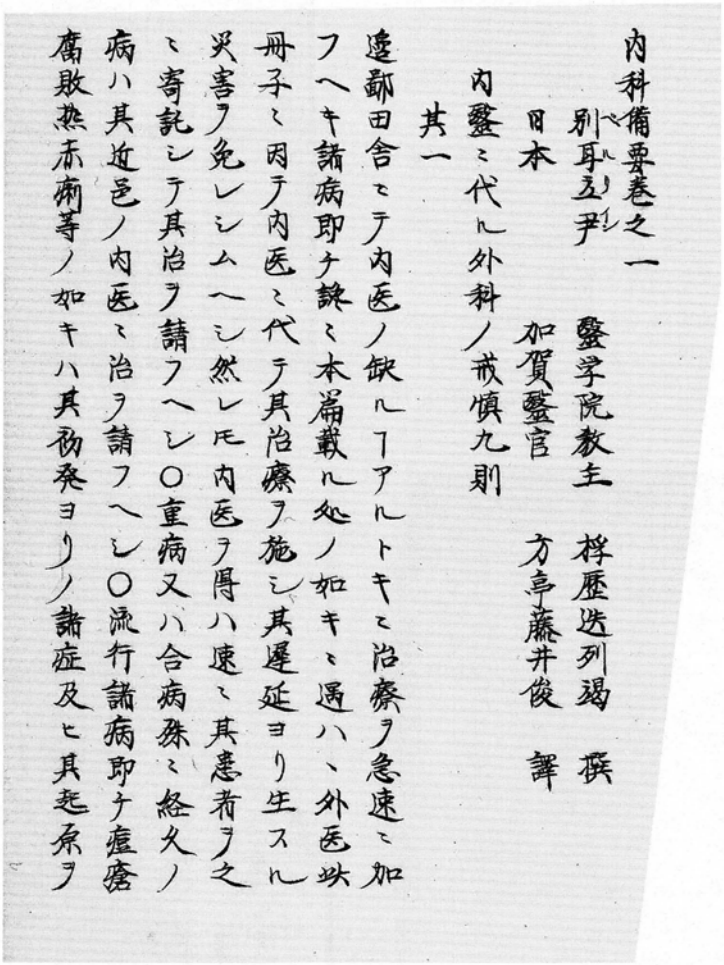

五液診法
乾
天保三壬辰仲秋
止善堂藏


大西醫典譯　江馬元恭先生著述　熱病門三卷　瘡麻門三卷　近刻
醫事咨詢　一卷　老子經王弼增註　二卷
論語訓詁解　十卷　不殘嗣出
喝蘭醫方纂要　江馬元弘先生著述　四卷
文化十三年丙子九月
書房
京師　河南四良兵衛
浪華　奈良屋長兵衛
東武　須原屋茂兵衛
加州金澤　松浦善兵衛
濃州大垣　松浦善兵衛

内科備要　　桴歴迭列竭(独)著　藤井方亭訳　5巻　出版年不詳　　1冊

訳者藤井方亭俊は伊勢の人で、加賀藩医。本書はベルリン大学医学教授桴歴迭列竭の内科書を訳述したものであるが、宗田文庫本は稿本と思われる。藤井方亭は玄真の著書『医範提綱』を筆録出版した諏訪士徳と同一人物であるといわれるが未詳な部分が多い。諏訪士徳は宇田川蘭学を知るのに重要な人物であるが、諏訪が藤井と同一人物であれば、『内科備要』がいっそう重要な資料になる。また本書は未完であったことから、これまでその存在が知られていなかった。しかし、翻訳の水準は高い。藤井方亭が相当な蘭学者であったことを語る資料である。(酒井シヅ)

SC/871/Fu　　00195189



内科備要巻之一

日本　別耳之尹　醫学院教主　桴歴迭列竭　撰

加賀醫官　方亭藤井俊　譯

内醫ニ代ル外科ノ戒慎九則

其一

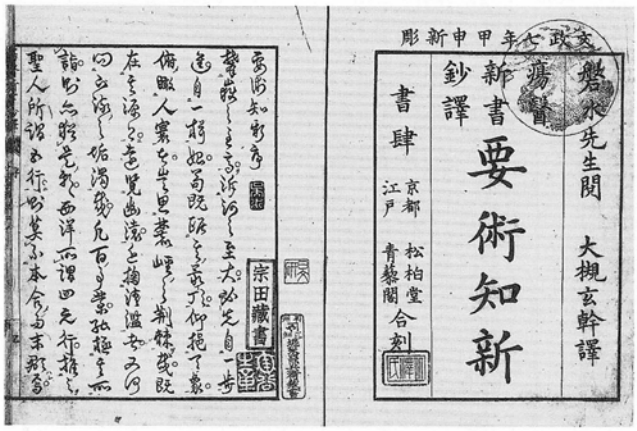
遠鄙田舍ニテ内医ノ缺ルアルトキニ治療ヲ急速ニ加フヘキ諸病即チ詳ニ本篇載ル処ノ如キニ遇ハヽ、外医ハ冊子ニ因テ内医ニ代テ其治療ヲ施シ其遅延ヨリ生スル災害ヲ免レシムヘシ然レ𪜈内医ヲ得ハ速ニ其患者ヲ之ニ寄託シテ其治ヲ請フヘシ○重病又ハ合病殊ニ経久ノ病ハ其近邑ノ内医ニ治ヲ請フヘシ○流行諸病即チ瘧瘡腐敗熱赤痢等ノ如キハ其初発ヨリノ諸症及ヒ其起原ヲ

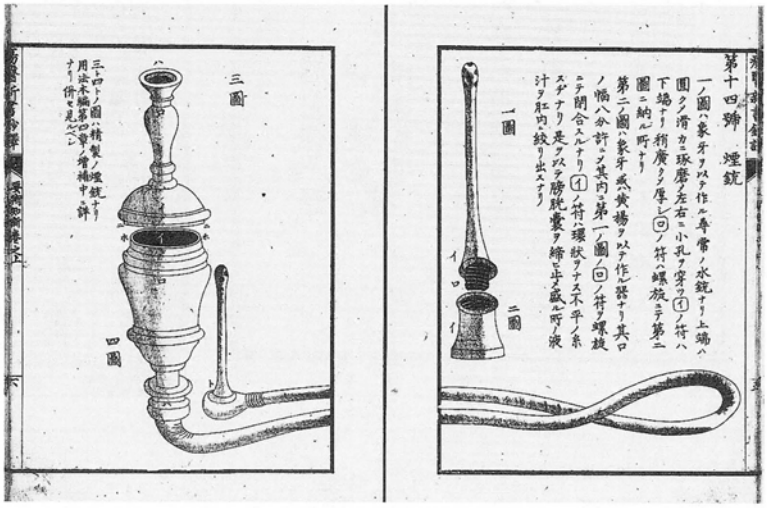
瘍医新書鈔訳要術知新

ラウレンス・ヘイステル著　大槻玄沢訳　大槻茂禎抄訳
3巻　　文政7年(1824)刊本　　3冊

本書の内容は凡例に「瘍医新書治術諸篇通計183編中の臀肛手術に係わる部中78編を抄訳し、増補と図説とを添え、分かちて3巻となし、仮に之を瘍術知新と題せり」とあるように、大槻玄沢の訳した『瘍医新書』から臀部、肛門の外科手術にかかわる部分を抄訳して、痔等の手術器具を図示し、その使用法を解説したものである。しかし本書は単に『瘍医新書』を抄訳したものでない。これまで本書に示した諸器具を入手しても誤用している場合が多いので、それぞれの器具を用いる適応症を示し、正しく使うことを目指して、図示し解説している。また、本書で採用した外科道具の名称に注釈と国語の呼称を付記している。本書中に出てくる薬名は訳さず原名を使っているが、宇田川榛斎の『遠西医方名物考』と中川淳菴の『和蘭局方』を参考にすることをもとめている。以上からうかがえるように、本書の内容は当時の蘭方の実態を示すものであり、また、本書の諸道具の解説は、ここに示した道具類で、いまとなっては不明な使用法を知る上での手がかりを与えてくれる。本書は稀少本であるが、宗田文庫本はそれに加えて美麗である。(酒井シヅ)

SC/871/He　　00196689-00196691



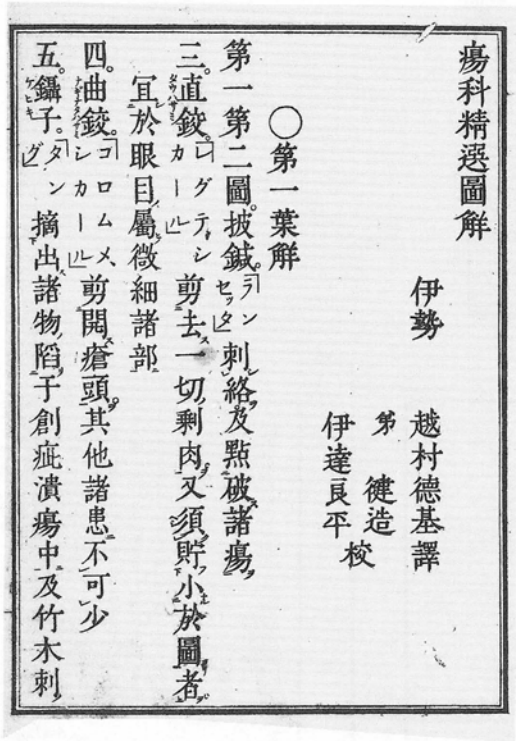


瘍科精選図解図編　［牢斂斯・苛意志著］／越村徳基著：牧墨仙画
文化二年(1819)序　刊本　1冊

瘍科精選図解解説　［牢斂斯・苛意志著］／越村徳基著：牧墨仙画
文化二年(1819)刊本　1冊

本書はハイステル著外科書（L.Heister: Heelkundige Onderwijzingen, 2nd ed.. 1755）の越村徳基による訳書（越村健造・伊達良平校）で、名古屋の永楽屋東四郎が出版元、校閲が吉雄常三（1787～1843）。図編と解説の2冊からなる本である。図26葉が入り、抄訳した説明文がつく。初版には牧墨仙の刻した銅板画（ハイステルと腕部切断図）2葉がつく。吉雄常三は耕牛の孫で、長崎に生まれたが、文化十三年（1816）から名古屋に住み、蘭学を教え、文政九年（1826）に尾張藩医となった人。越村徳基は伊勢の人、本書はハイステルの外科書で図がきれいなことで著名であるが、吉雄常三と尾張の蘭学を語るとき必見の資料である。宗田文庫本は美麗である。（酒井シヅ）

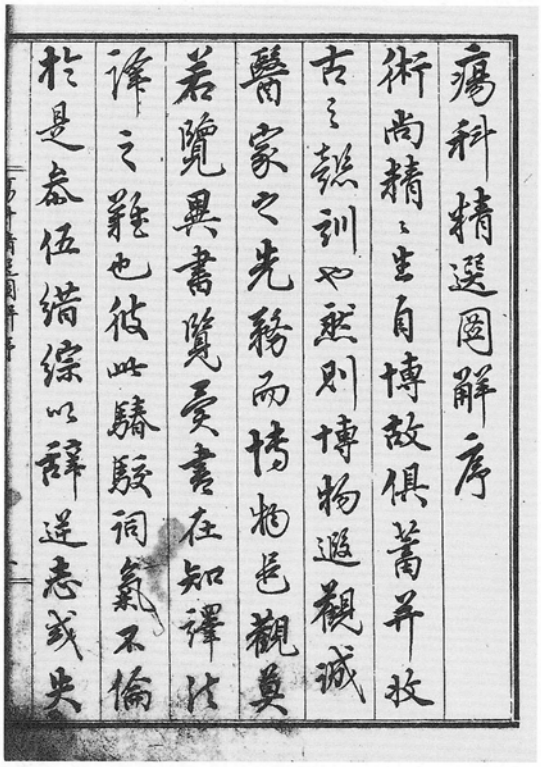
SC/871/He　00196692,00196693


瘍科精選圖解

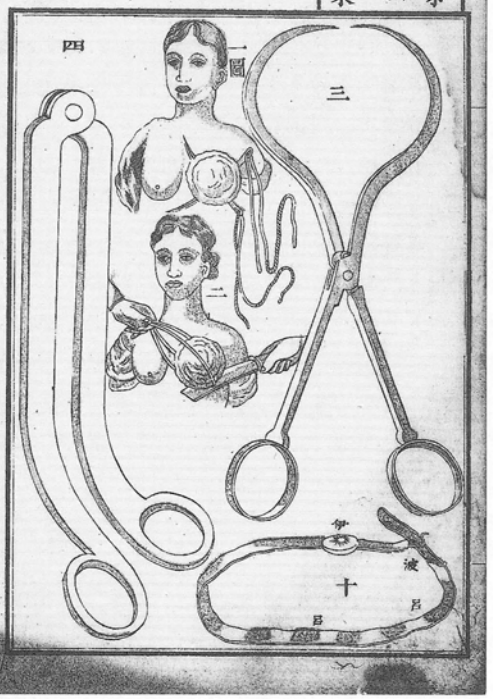
伊勢　越村德基譯
弟　健造
伊達良平　校

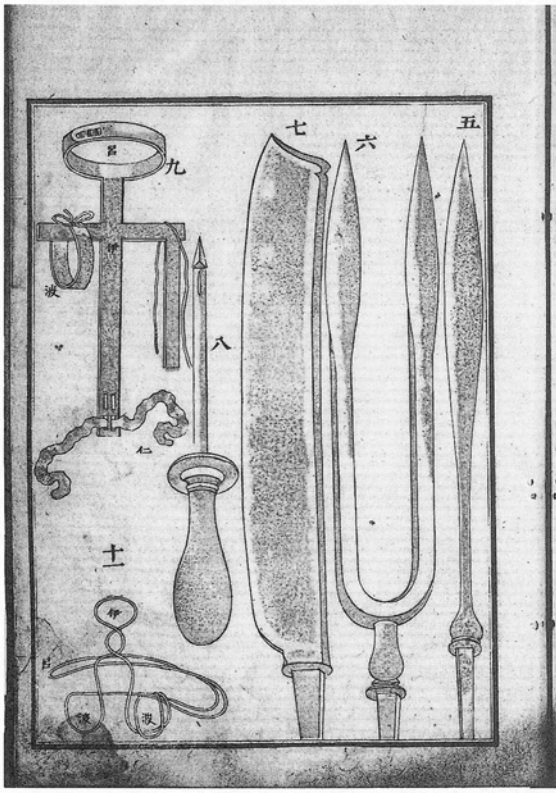
○第一葉解

第一第二圖披鍼（ランセタ）刺絡及點破諸瘍
三直鉸（ヒグテシカール）剪去一切剩肉又須貯小於圖者
宜於眼目屬微細諸部
四曲鉸（コロムメシカール）剪開瘡頭其他諸患不可少
五鑷子（ダン）摘出諸物陷于創疵潰瘍中及竹木刺


瘍科精選圖解序

術尚精之生自博故俱蒿并收
古之訓也然則博物遐觀誠
醫家之先務而博物邑觀莫
若覽異書覽異書在知譯代
譯之難也彼此驕駁詞氣不倫
於是叅伍錯綜以辭逆志或失





○第十八葉

第一圖。大鍼刺貫乳岩根底狀

二。同前既貫絲且切斷狀

三。鑷圍乳房迫出乳岩

四。同前別種功同前具

五。刺貫乳岩具

六。雙股刀刺大乳岩

七。刀切乳岩

八。咄落乙伽爾水腫病穿腹

九。治佝僂具。㋑十字處當脊㋺環圍項㋩縧縛脘㋥

縧縛身

十。帶治臍崩（ナーヘルブレウヒ凡諸部本位ヲ失フ者ヲブレウクト云ブレウクハ崩ノ義也陰囊崩腸崩ノ類也）當㋑小圓枕于臍上以㋺帶纏身以㋩鈎結之

十一。同前別種帶。以革卷銅線。如圖繚繞㋑當臍上。㋺夾身㋩當鼠蹊

○第十九葉

第一圖。狀刀（ルボルグンメス）切漏瘡推㋺則鋒穎現鞘外

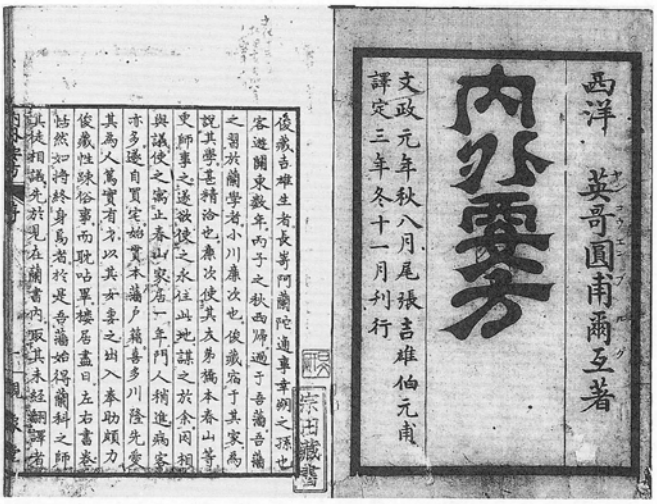
二。同前別種。刀現于鞘外㋥半規防行術時腸超出于刀上而毀傷

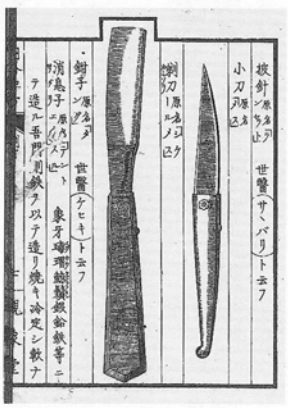
和蘭内外要方

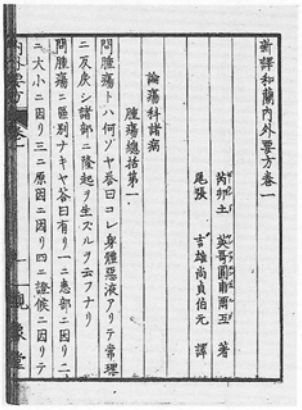
ヤンコウエンブルグ(蘭)著　吉雄伯玄甫訳　12巻
文政三年(1820)刊本　12冊

本書の訳者吉雄伯玄甫は吉雄耕牛の孫で、俊蔵、権之助、常三と称した。長崎に生まれ、長じてから各地で蘭学を教えていた。名古屋に永住したきっかけは、文化十三年（1814）関東からの帰り名古屋で小川廉次の求めに応じて蘭学を教えたところ、評判を呼び、弟子や患者が集まったことにあった。文政九年（1826）に尾張藩に初の蘭方医として登用された。本書に尾張藩医浅井正封の序があるが、そこに吉雄俊蔵の伝記ならびに本書が刊行に至る経緯を記している。また、例言には原本の解説、汎用する外科器具を図示して解説している。原本は海上外科内科書（第4版1758年刊）であるが、陸上でも十分に有用であるとして訳した本とある。吉雄は原本の第3版（1733年刊）も参考にしている。事物の訳名はいたずらに新訳を用いず「薬剤は三法方典に従い、病名は内科撰要、人身諸器は解体新書、医範提綱等に従う。これ皆既に上木して世人耳目の習慣するところなるが故なり」と当時、多用された書名を示す。このように本書には蘭学史、医学史の研究に寄与する記事が多い。本書は名古屋の永楽屋東四郎で出版され、江戸、京都でも販売されたが、その数は多くない。宗田文庫本は全巻が揃い、美本である。(酒井シヅ)

SC/871/Ko　　00195718-00195722,00195724-00195730





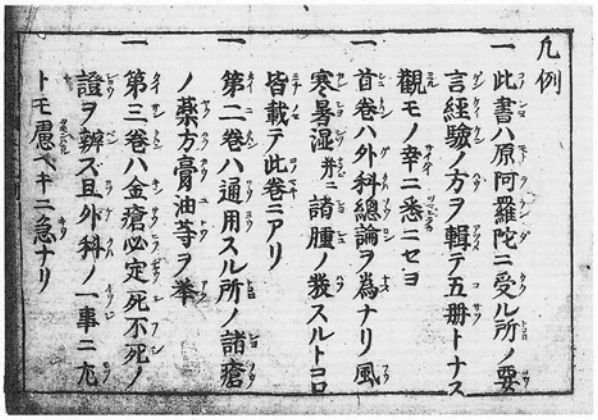


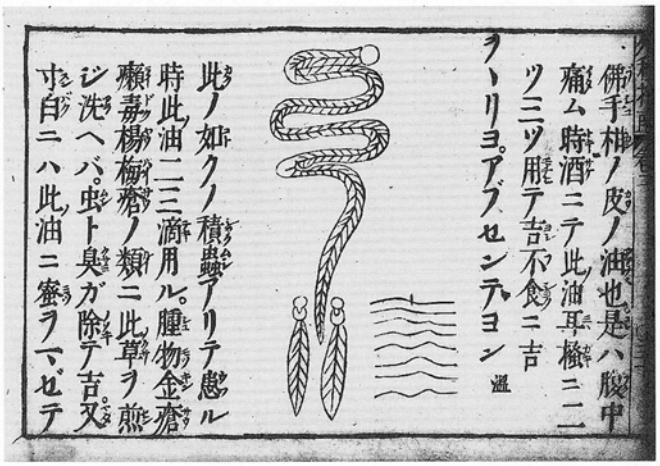
阿蘭陀外科指南　著者名欠　5巻　元禄九年(1696)刊本　1冊

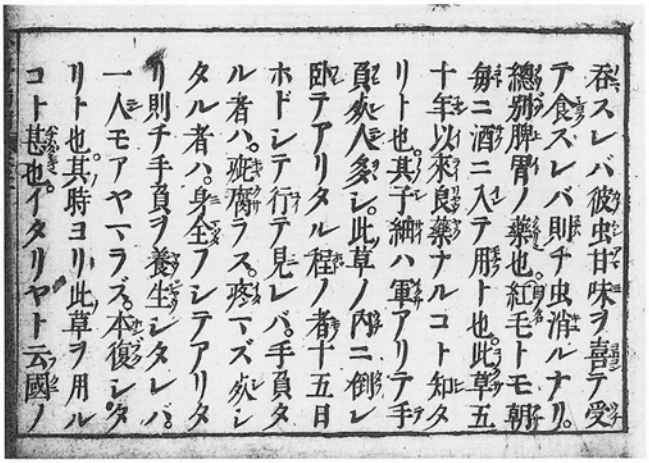
本書は阿蘭陀人外科から受けた要言経験の方を集めて5冊としたもので、首巻は外科総論で風寒湿ならびに諸腫について記述し、第2巻に諸瘡の薬方膏薬等をあげ、第3巻に金瘡の致死か否かの証を論じ、第4巻は薬草の製法を述べ、第5巻に腫物の名、薬物の外国名と訳語をイロハ順で示している。阿蘭陀人から学んだ外科というが、内容は南蛮外科を交えている。元禄時代に流布されていた、いわゆる西洋外科をまとめた書物である。

(酒井シヅ)

SC/871/Or　00197506


凡例
一 此書ハ原阿羅陀ニ受ル所ノ要言経験ノ方ヲ輯テ五冊トナス観モノ幸ニ悉ニセヨ
一 首巻ハ外科總論ヲ為ナリ風寒暑湿并ニ諸腫ノ發スルトコロ皆載テ此巻ニアリ
一 第二巻ハ通用スル所ノ諸瘡ノ薬方膏油等ヲ挙
一 第三巻ハ金瘡必定死不死ノ證ヲ辨ズ且外科ノ一事ニ尤トモ慮ベキニ急ナリ


佛手柑ノ皮ノ油也是ハ腹中痛ム時酒ニテ此油耳穴ニ二ツ三ツ用テ吉不食ニ吉
ラトリヨ。アブセンテヨン 溫
此ノ如クノ積蠱アリテ患ル時此油二三滴用ル。腫物金瘡癩毒楊梅瘡ノ類ニ此草ヲ煎ジ洗ヘバ。虫ト臭ガ除テ吉。又寸白ニハ此油ニ蜜ヲ〻ゼテ


呑スレバ彼虫甘味ヲ喜テ受テ食スレバ則チ虫滑ルナリ。總別脾胃ノ薬也。紅毛トモ朝毎ニ酒ニ入テ用ト也。此草五十年以來良薬ナルコト知タリト也。其子細ハ軍アリテ手負人多シ。此草ノ内ニ倒レ臥テアリタル程ノ者十五日ホドシテ行テ見レバ。手負タル者ハ。疵腐ラス。疼〻ズ疼レタル者ハ。身全フシテアリタリ則チ手負ヲ養生シタレバ。一人モアヤ〻ラズ。本復シタリト也。其時ヨリ此草ヲ用ルコト甚也。イタリヤト云國ノ

阿蘭陀外科書　　2巻　江戸末期写本　　1冊

本書には宗田一氏の註「本書は寛文元年孟春の伝授本（津村見伯から橋本玄知宛）で、カスパル直伝の秘方をもっているとあり（中巻）、下巻では金瘡に「紅毛外科」によった如く記しているから猪俣伝兵衛の紅毛外科によったものと思われる。また、本書上巻にはカスパル十七方を記し、これは長崎奉行黒川与兵衛、甲斐庄長右衛門の命で向井玄松が撰した外科書」がある。カスパルは慶安二年から四年（1649～1651）の間、滞日して、江戸、長崎で通詞猪俣伝兵衛を介して外科を教え、それがカスパル流あるいは猪俣伝兵衛の紅毛外科となって後世に伝えられた。向井玄松（升）（1609～77）は長崎の人、天文学、医学、儒学に長じ、奉行、大名の求めに応じて蘭医から医学を学び、編著を残している。本書は腫物の性質、膏薬の効能、煉法。薬種、油薬などを記すが、文中にエンハラストメリロウトについて「メリロウト云う膏薬は於平戸に寛永十三年三月三日に阿蘭陀メステル直に伝する者也」とあり、「膏薬デラアフル常に秘之…　是は寛文七年に末の五日阿蘭陀国よりテラアフルというメステル来、数年彼が遣い覚えたという妙奇特有之也」の記事がある。末尾に数原通玄門弟佐田通仙家伝の処方を安永二年に写すとある。（酒井シヅ）

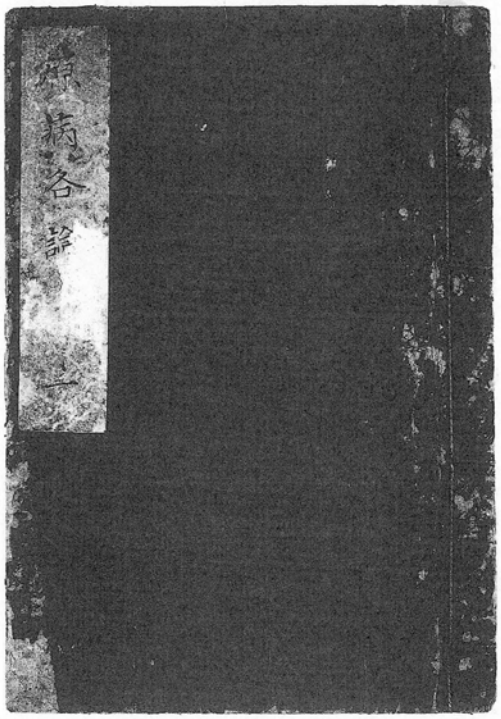
SC/871/Or　　00195661

メリロウトニ膏茅ハ於江戸ニ
寛永十三年三月ニ初ニ阿
蘭陀メステル直ニ傳者也
難為秘事ニ其製法煮ル仕也
米四十三インクエントヘシヒタ
アル
一仙人草ノ汁五合松脂五十匁
ヒルトカル油見合テ煉練ア
キリヤ同前此能ハ名悪瘡
膿ヲ吸悪肉ヲ去肌肉ヲ生メ
イキニ吉　大温
一膏茅ヤインクエントクヘシ

一黄蠟　平一アリイ根　温
一子ヤン　熱一テレメン　熱
一乳香　温一玉乳香　温
一明磐　微寒一丹磐　寒
一紫丹　寒一樟脳　温
一タクノ實　微寒一子ツキ脂　熱
一モツヤク　温一鬢金　微寒
膏茅デラアル常秘之
一人参　焙粉メ羊ハ朱スハラル
水ニメ水ヒノ粉四朱　羊ハ洛焙
粉ニテ羊ニ朱ニキミノ葉焙粉
ニテ　虎皮黒焼粉ニメ

二味顧鱗血粉ニメ女ニ麝香
能スリテニ朱　麻角白焼粉メ
モ檜ノ木肌ニテ粉メ二ツ石
各能粉メ後松脂貳匁能
煉コシテ不鍋ニ黒胡麻ノ油
白ニホリ鍋ニ煮立テ松脂モ
トケル時各石粉茅ヲ入猪テ
能カキ也煉也古伝有之油一合
五ノ是ハ寛文七年ニホノ吾
阿蘭陀回ヨリテラアルト云
メステル未数年彼カ遺覚タ
トニ物ヲ奇特有之也

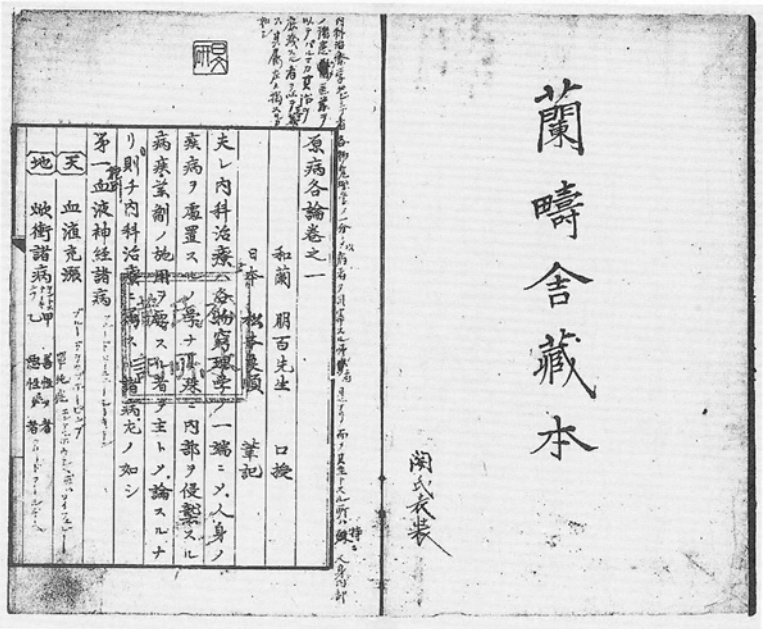
原病各論　ポンペ口授、松本良順筆記　1～2，4～6，8巻,10巻　写本　7冊



ポンペ（Johannes Lidyus Pompe van Meerdervoort,1829-1908）は安政四年（1857）から文久二年（1862）までの５年間長崎に滞在して幕府の官医松本良順とその門人に医学の系統講義を行った。本書はそのときの病理学講義録。本書に「松本氏蔵記」の蔵書印がある。蘭疇（松本良順）舎蔵本関寛斎表装の稿本を門人関寛斎が表装したものである。関寛斎は上総東金の人、銚子で開業していたが、ヤマサ醤油の浜口梧稜の援助で長崎に留学してポンペに従学した。ポンペの講義録は門人の間で転写されたが、本書はその原本となったものとみなされる。ポンペは近代病理学を最初に講義したことで本書は貴重であるが、行間の書き込みは松本良順の所感である可能性があり、本書はポンペの講義内容だけでなく、松本良順研究にとっても貴重である。

（酒井シヅ）

SC/871/Po　　00209777-00209783

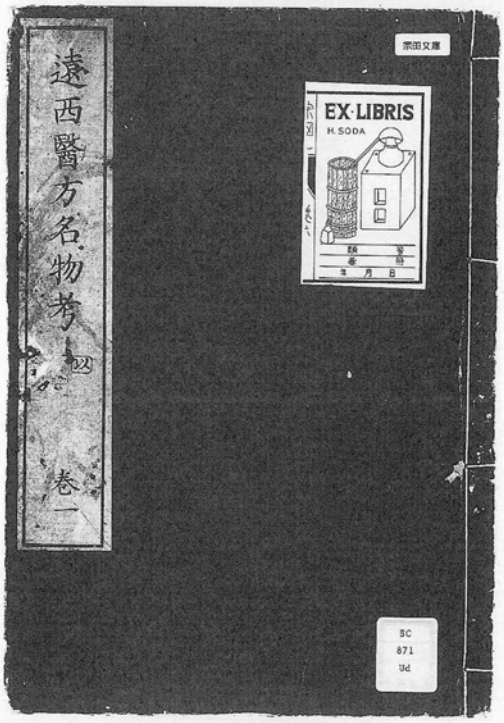


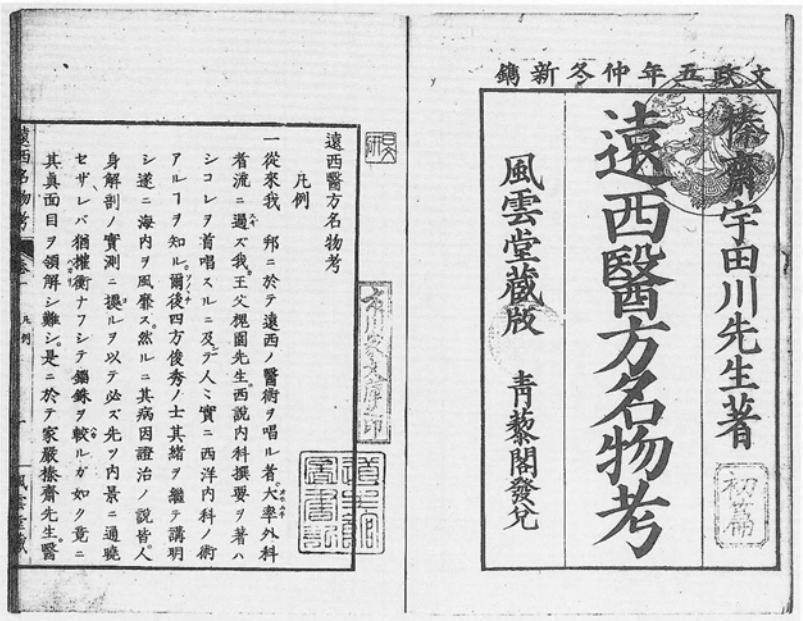
遠西医方名物考

宇田川榛斎訳・宇田川榕菴校補　36巻
文政五年～八年(1822～25)刊本　36冊

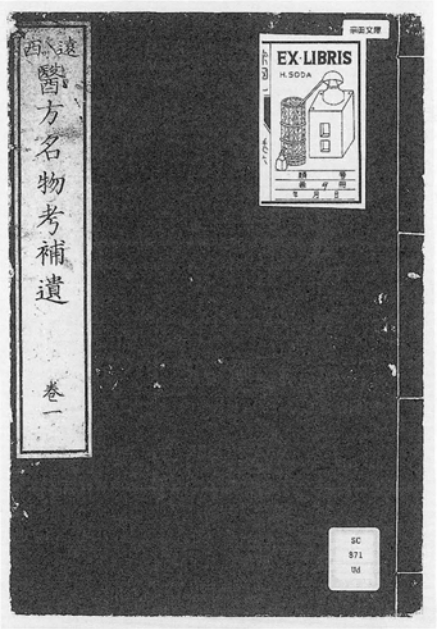
宇田川榛斎の蘭方内科書『増補重訂内科撰要』に対する西洋薬物書として編纂されたもの。『増補重訂内科撰要』の刊行にさきがけて、文政五年から同八年にかけ、青藜閣須原屋伊八発売として12編36巻として刊行された。西洋薬物をイロハ順に記載し、薬物の産地・形状・製薬法・調剤法・薬効・用薬法などが述べられている。巻36は図攷として、植物図58、動物図７を図示している。植物図の大部分は、ワインマン（J. W. Weinmann）の『薬用植物図譜』(Taalryk register der plaat-ofte figuur-beschryvingen der bloemdragende gewassen, 1736～48)の図やミュンチング(Abraham Munting)の『植物の正しい栽培』(Waare Oeffening der Planten, 1672）の図を転写したものである。西洋薬物百科全書として明治期にいたるまでよく利用された。宗田一「宇田川家三代の実学－『西説内科撰要』と関連薬物書をめぐって－」(『実学史研究Ⅴ』）参照。(遠藤正治)

SC/871/Ud　00194979-00194999,00195001-00195009,00195011-00195016



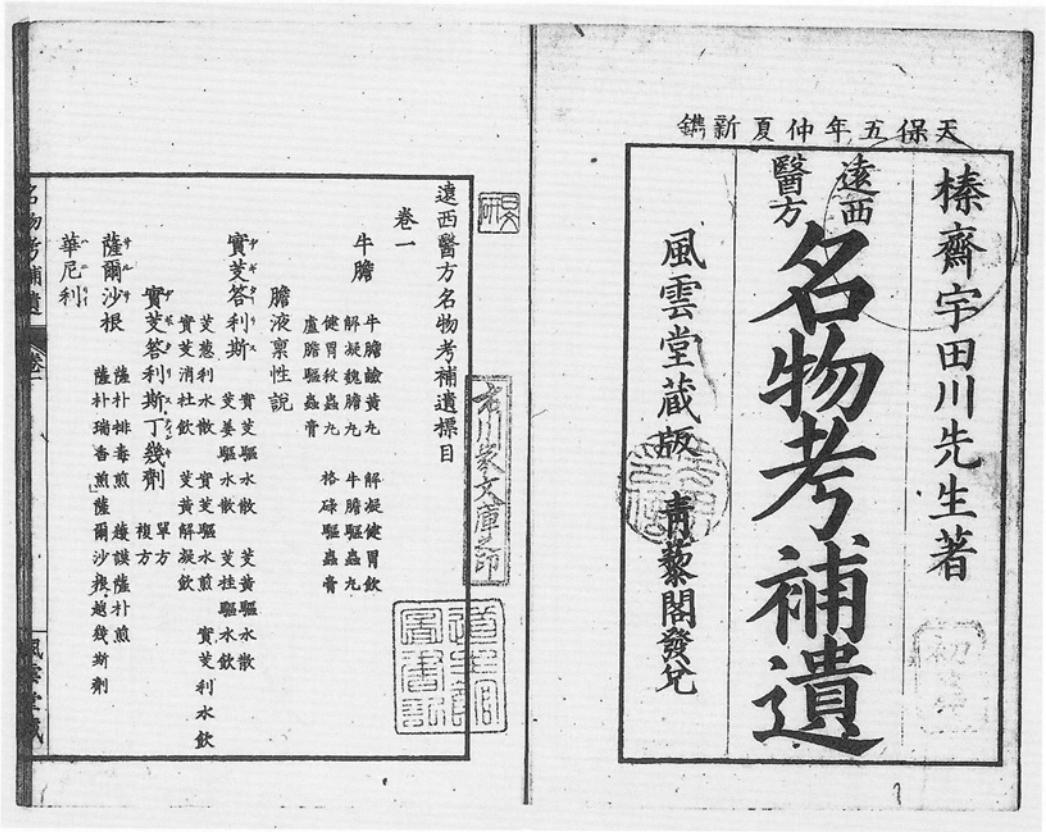


遠西医方名物考補遺　宇田川榕菴校補　9巻　天保六年(1835)再版本　9冊



宇田川榛斎訳『遠西医方名物考』の補遺として天保四年（1833）から同五年（1834）にかけて3編9巻が刊行されたが、翌六年（1835）に緒方洪庵の凡例を加えた再版本が出された。本書は、見返しに「文政五年仲冬新鐫」とあるが、洪庵の凡例があるので、この再版本である。巻6までに牛膽・ヂギタリス・サルサ根などが取り上げられ、巻七以下は温素・光素・ガス・酸素・窒素・水素・炭素・炭酸・大気・土について記述があり、温度計・排気鐘について図説がある。補遺に引用書目として蘭書多数が挙げられている。（遠藤正治）

SC/871/Ud　　00195018-00195026

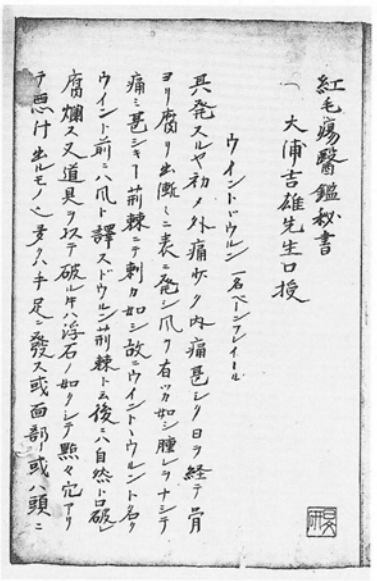

天保五年仲夏新鐫
榛齋宇田川先生著
遠西醫方名物考補遺
風雲堂藏板
青藜閣發兌

遠西醫方名物考補遺標目
卷一
牛膽　牛膽鹽黄丸　解凝魏膽丸　健胃飲　解凝健胃飲　牛膽驅蟲丸　健胃秘蟲丸　盧膽驅蟲膏　格碎驅蟲膏
膽液稟性說
實芰答利斯　實芰驅水散　芰姜驅水散　芰黄驅水散　芰柱驅水飲　實芰利水飲　芰葱利水散　實芰消杜飲　實芰黄解凝飲
實芰答利斯丁幾劑　單方　複方
薩爾沙根　薩朴排毒煎　薩朴瑞香煎　薩朴煎　薩爾沙根越幾斯劑
華尼利

紅毛瘍医鑑秘書　　吉雄[耕牛]口授　写本　　1冊

巻頭に紅毛瘍医鑑秘書、大浦吉雄先生口授とある。吉雄耕牛は和蘭通詞の吉雄家の五代目、大通詞、通詞目付をつとめ、傍ら蘭館医ムスクルス、バウエル、ドゥ・アウト、ツンベルグに師事してオランダ医学を学び、吉雄流の始祖となった人。通称が定次郎、幸左衛門、幸作、諱は永章、号が耕牛、養浩斎、成秀館。吉雄流外科は栗崎流、楢林流に並ぶ長崎に発した三大外科の一つであり、著作に紅毛秘事、紅毛流膏薬方、阿蘭陀膏薬方、紅毛流膏薬煉書　ウォント・ブック、金瘡口訣、外療秘伝集、紅毛瘍医鑑があるが、刊行されたものはほとんどないために吉雄外科の内容はこうした秘伝書から知ることができる。本書には、膏薬煉之方法、巻木綿尺寸之方、金瘡、付薬之方、癰、癰疽半陰半陽之証、癰疽不治之症、疽、疔の各項についてのべている。付図は29図。(酒井シヅ)

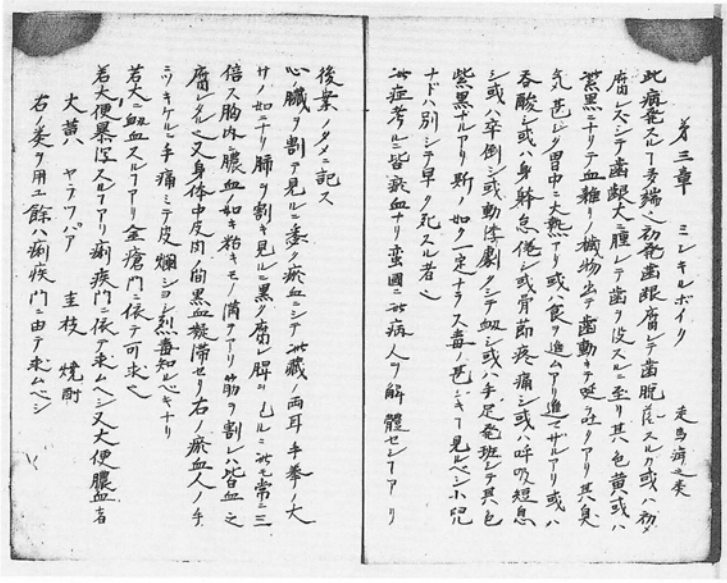
SC/871/Yo　　00195575


紅毛瘍醫鑑秘書
大浦吉雄先生口授

ウインドゥルン　一名ベーンブレイール

其発スルヤ初ノ外痛ヤク内痛甚シク日ヲ経テ骨ヨリ腐リ出既ニ表ニ発シ爪ノ有ガ如シ腫レナシテ痛ミ甚シキ一荊棘ニテ刺カ如シ故ニウインドゥルントハ名ク

ウインド前ニハ爪ト譯スドウルン共刑棘トス後ハ自然ト破レ腐爛スル又道具ヲ以テ破ルヤハ浮石ノ如クシテ黙々穴アリテ悉付出ルモノ之夫人手足ニ発スル或面部或ハ頭ニ


第三章　ミレキルボイク　　走馬清之奏

此瘍発スルノ多端初発歯眼腐テ歯脱落スルカ或ハ初腐レ欠シテ歯齦大腫レテ歯ヲ没スルニ至リ其色黄或ハ黒ニナリテ血難リノ機物出テ歯動キテ咬合クアリ其臭気甚シク胃中大熱アリ或ハ食ヲ進ムアリ進マザルアリ或ハ呑酸ニ或ハ身躰怠倦ニ或骨節疼痛ニ或ハ呼吸短息ニ或ハ卒倒ニ或動悸劇クシテ血ニ或ハ手足発斑シテ其色紫黒ナルアリ斯ノ如ク一定ナラス毒ノ甚シキヲ見ルベシ小兒ナドハ別シテ早ク死スル者ニ

諸症考ルニ皆瘀血ナリ蛮國ニ於病人ヲ解體セシアリ

後案ノタメニ記ス

心臓ヲ割テ見ルニ悉ク瘀血ニシテ此臓ノ両耳手拳ノ大サノ如ニナリ肺ヲ割キ見ルニ黒ク腐レ脾ハ已ニ此ニ於テ常ニ三倍ス胸内ニ膿血ノ如キ粥キモノ満アリ筋ヲ割レハ皆血之腐レ乱ル又身体中皮内面黒血凝滞セリ右ノ瘀血人ノ手ニツキケル手痛ミテ皮爛シロ上熱毒知ベキナリ

若大ニ血ヌルアリ金瘡門ニ依テ可求ベ

若大便暴泄スルアリ痢疾門ニ依テ求ムベシ又大便膿吉

大黄　ヤラワバア　圭枝　焼酎

右ノ薬ヲ用ユ餘ハ痢疾門ニ由テ求ムベシ